三雲・井原遺跡X

―三雲南小路・八龍地区の調査―

糸島市文化財調査報告書

第 17 集

2018

糸島市教育委員会

三雲・井原遺跡南小路地区465番地全景写真（真上から）

巻頭図版２

三雲・井原遺跡八龍地区２２４番地全景写真（真上から）

三雲八龍224番地
1号甕棺上棺

三雲八龍224番地
1号甕棺下棺

三雲八龍224番地
4号甕棺下棺

序

本書は平成17年度と25年度に、三雲・井原遺跡において実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

三雲・井原遺跡が所在する糸島市は３世紀の歴史書『魏志』倭人伝に登場する伊都国が所在したと考えられる場所で、古来より、中国・朝鮮半島との積極的な交流が展開され、当時の政治・経済・外交の拠点として、我が国の文化形成に重要な役割を果たしてきました。

糸島市教育委員会では、平成６年度から三雲・井原遺跡の確認調査を継続的に行い、王に次ぐ有力者層の墳墓群や居館の濠と思われる方形区画などの確認、長方形板石硯などを確認し、これまでに知られていた三雲南小路王墓と合わせて、国史跡の指定を目指した取り組みを進めてきましたが、平成29年10月13日に市内８か所目の国史跡として指定されました。今後は、市内に数多くの点在する貴重な文化財とともに、歴史と自然が息づく素晴らしい景観を含めて、その保護と活用が必要であり、本書が歴史解明の一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが、三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会の委員の皆様、ご理解とご協力を頂きました地権者および周辺地域の方々、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成30年３月31日

糸島市教育委員会
教育長　家宇治　正　幸

例　　言

1．本書は糸島市に所在する三雲・井原遺跡で平成17年度と25年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2．本書は平成29年度の国庫補助事業を受け作成した。
3．遺構の実測は、調査を担当した江﨑清隆・平尾和久が行った。
4．遺構の写真は空中写真を㈲空中写真企画・諫山広宣に委託し、その他は江﨑・平尾が撮影した。
5．遺物の復元・実測・製図にあたっては、江﨑・平尾のほかに、藤野さゆり・三嶋弘美・田中阿早緑・内山久世・藏田和美が行った。
6．本書の執筆は江﨑と平尾が分担し、それぞれの本文末尾に執筆者の氏名を記している。
7．三雲・井原遺跡における調査区は小字を用いた表記とする。
8．出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり。
　丹塗り　スス　コゲ
9．本書で用いる座標は日本測地系である。
10．本書の編集は平尾が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
第３章　調査の記録 …… 12
　Ⅰ．南小路地区465番地（平尾和久） …… 12
　Ⅱ．八龍地区224番地（江崎靖隆） …… 35
第４章　まとめ …… 64
　Ⅰ．三雲・井原遺跡の掘立柱建物について…… 64

挿　図　目　次

第１図　糸島市の所在地…… 2
第２図　糸島地域主要遺跡分布図…… 3
第３図　三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図… 4
第４図　三雲・井原遺跡調査区配置図（1/8,000）…… 7
第５図　南小路地区における本報告調査区配置図（1/2,500）…… 8
第６図　三雲南小路465番地１号住居跡実測図（1/60）……13
第７図　三雲南小路465番地住居跡出土遺物実測図（1/3）……13
第８図　三雲南小路465番地１号・２号掘立柱建物実測図、出土遺物実測図（1/60・1/3）……14
第９図　三雲南小路465番地１号甕棺墓実測図・甕棺実測図（1/20・1/6）……15
第10図　三雲南小路465番地１号土坑実測図（1/30）……16
第11図　三雲南小路465番地１号土坑出土遺物実測図①（1/3）……17
第12図　三雲南小路465番地１号土坑出土遺物実測図②（1/3）……18
第13図　三雲南小路465番地大溝トレンチ３・４土層断面図（1/40）……18
第14図　三雲南小路465番地大溝トレンチ１出土遺物実測図（1/3）……19
第15図　三雲南小路465番地大溝トレンチ２出土遺物実測図（1/3）……20
第16図　三雲南小路465番地大溝トレンチ３出土遺物実測図①（1/3）……21
第17図　三雲南小路465番地大溝トレンチ３出土遺物実測図②（1/3・●は1/2）…22
第18図　三雲南小路465番地大溝トレンチ４出土遺物実測図①（1/3）……23
第19図　三雲南小路465番地大溝トレンチ４出土遺物実測図②（1/3・●は1/2）…25
第20図　三雲南小路465番地大溝トレンチ５・６出土遺物実測図（1/3）……26
第21図　三雲南小路465番地大溝上包含層出土遺物実測図（1/3・●は3/4）……27
第22図　三雲南小路465番地大溝検出時出土遺物実測図（1/3・●は1/2）……27
第23図　三雲南小路465番地北側トレンチ出土遺物実測図（1/3・●は1/2）……28
第24図　三雲南小路465番地南側トレンチ包含層出土遺物実測図（1/3・●は1/2）……29

第25図　三雲南小路465番地北側調査区包含層出土遺物実測図（1/3・○は3/4・●は1/2）……31
第26図　三雲南小路465番地南側調査区包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）……33
第27図　三雲八龍224番地調査区全体図（1/200）……37～38
第28図　三雲八龍224番地１号溝Ｃトレンチ平・断面実測図（1/40）……39
第29図　三雲八龍224番地１号溝Ｄトレンチ平・断面実測図（1/40）……40
第30図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図①（1/3）……41
第31図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図②（1/3）……42
第32図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図③（1/3）……43
第33図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図④（1/3）……44
第34図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図⑤（1/3）……45
第35図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図⑨（1/3）……46
第36図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図⑥（1/3）……46
第37図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図⑦（1/3）……47
第38図　三雲八龍224番地１号溝出土遺物実測図⑧（1/3）……48
第39図　三雲八龍224番地２号溝Ｆトレンチ土層断面実測図（1/40）……48
第40図　三雲八龍224番地２号溝Ｅトレンチ平・断面実測図（1/40）……49
第41図　三雲八龍224番地２号溝出土遺物実測図（1/3）……50
第42図　三雲八龍224番地１号住居跡実測図（1/40）……51
第43図　三雲八龍224番地１号住居跡出土遺物実測図①（1/3）……52
第44図　三雲八龍224番地１号住居跡出土遺物実測図②（1/3）……53
第45図　三雲八龍224番地２号住居跡実測図（1/40）……55
第46図　三雲八龍224番地２号住居跡出土遺物実測図①（1/3）……56
第47図　三雲八龍224番地２号住居跡出土遺物実測図②（1/3）……57
第48図　三雲八龍224番地７号住居跡実測図（1/40）……57
第49図　三雲八龍224番地７号住居跡出土遺物実測図（1/4）……57
第50図　三雲八龍224番地２号住居跡、１号木棺墓、2・4号甕棺墓平面実測図（1/40）……58
第51図　三雲八龍224番地１号木棺墓実測図（1/40）……59
第52図　三雲八龍224番地１・２号甕棺墓実測図（1/20・1/8）……60
第53図　三雲八龍224番地３・４号甕棺墓実測図（1/20・1/8）……61
第54図　三雲八龍遺跡周辺実測図（1/2,500）…63
第55図　三雲南小路地区遺構配置図（1/1,000）……65
第56図　三雲井原遺跡掘立柱建物変遷図（1/120）……67

付図１　三雲南小路465番地調査区全体図（1/200）

表１　三雲・井原遺跡における掘立柱建物一覧……68

図　版　目　次

巻頭図版１　三雲・井原遺跡南小路地区465番地全景写真（真上から）
巻頭図版２　三雲・井原遺跡八龍地区224番地全景写真（真上から）
巻頭図版３　三雲八龍224番地　１号甕棺上棺　１号甕棺下棺　４号甕棺下棺
図版１－１　三雲南小路地区465番地遠景（東から）
図版１－２　三雲南小路地区465番地全景
図版２－１　大溝全景（下からトレンチ１・２・３・４）
図版２－２　１号掘立柱建物全景
図版３－１　１号住居跡（西から）
図版３－２　１号土坑（北西から）
図版３－３　大溝トレンチ３土層断面
図版４－１　甕棺墓
図版４－２　三雲井ノ川地区511番地調査区遠景
図版４－３　三雲井ノ川地区511番地調査区全景
図版５　三雲南小路地区465番地出土遺物①
図版６　三雲南小路地区465番地出土遺物②
図版７　三雲南小路地区465番地出土遺物③
図版８　三雲南小路地区465番地出土遺物④
図版９　三雲南小路地区465番地出土遺物⑤
図版10　三雲南小路地区465番地出土遺物⑥
図版11－１　三雲八龍地区224番地１号溝Ｃトレンチ土層断面状況（南から）
図版11－２　三雲八龍地区224番地１号溝Ｄトレンチ土層断面状況（南から）
図版11－３　三雲八龍地区224番地２号溝Ｅトレンチ土層断面状況（南から）
図版12－１　三雲八龍地区224番地２号溝Ｆトレンチ土層断面状況（南から）
図版12－２　三雲八龍地区224番地１号住居完掘状況（真上から）
図版12－３　三雲八龍地区224番地１号住居土器出土状況（北から）
図版13－１　三雲八龍地区224番地２号住居と甕棺墓群（真上から）
図版13－２　三雲八龍地区224番地１号木棺墓出土状況（東から）
図版13－３　三雲八龍地区224番地１号甕棺墓検出状況（北から）
図版14－１　三雲八龍地区224番地３号甕棺墓検出状況（西から）
図版14－２　三雲八龍地区224番地４号甕棺墓検出状況（北から）
図版14－３　三雲八龍地区224番地敷石遺構検出状況（西から）
図版15　三雲八龍地区224番地出土遺物①
図版16　三雲八龍地区224番地出土遺物②
図版17　三雲八龍地区224番地出土遺物③
図版18　三雲八龍地区224番地出土遺物④
図版19　三雲八龍地区224番地出土遺物⑤

第１章　はじめに

三雲・井原遺跡は弥生時代～古墳時代にかけての集落遺跡で、伊都国の中心地と考えられる重要な遺跡である。遺跡は糸島市東部の瑞梅寺川と川原川に挟まれた微高地に立地し、南北約1,500m、東西約750mの平面二等辺三角形状を呈し、面積は約60haと推定される。遺跡の発見は江戸時代の三雲南小路遺跡に始まり、昭和40年代末から50年代中ごろまでに実施された圃場整備を契機とした福岡県教育委員会による発掘調査を経て、平成６年度より前原町（以後、前原市を経て、現糸島市）による国庫補助事業として遺跡の内容・範囲確認調査を平成28年度まで継続的に実施した。本報告では平成17年度と平成25年度に実施した発掘調査の成果を報告する。

三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会（平成25年度設置）

委員長　西　谷　　正（海の道むなかた館館長・九州大学名誉教授）

委　員　工　楽　善　通（大阪府立狭山池博物館館長）

柳　田　康　雄（元國學院大學教授）

小　西　龍三郎（株式会社　修復技術システム代表取締役）

武　末　純　一（福岡大学教授）

難　波　洋　三（独立行政法人奈良文化財研究所）

糸島市教育委員会

平成29年度（報告書作成）

総　括	教育長	家宇治　正　幸	
	教育部長	泊　早　苗	
	文化課長	角　浩　行	
	文化課長補佐兼文化・図書館係長	古　川　秀　幸	
	文化課文化財係長	村　上　敦	
庶　務	文化課文化・図書館係主事	安　本　成　沙	
報告書作成	文化課文化財係主任主査	江　﨑　靖　隆	
		平　尾　和　久（編集）	
	主事	秋　田　雄　也	

なお、本報告書作成にあたり、文化庁、福岡県教育委員会のご指導・ご支援・ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。（平尾和久）

第２章　位置と環境

Ⅰ．地理的環境

三雲・井原遺跡は福岡県西部の糸島市に所在する。糸島市は平成22年１月１日に前原市と二丈町、志摩町とが合併して誕生した市で、東は福岡市、西は佐賀県唐津市、南は佐賀市と接する。面積は216.15㎢、人口100,730人（平成29年12月31日現在）の市で、近年は区画整理事業も進行するなど、福岡市近郊都市に見られるベッドタウン化が急速に進行している。また、人口の約半分が国道202号線沿いに集中し、残りの半分は田園地帯が多く残る市域全体に広がる。

第1図　糸島市の所在地

地形的には南に井原山、雷山、羽金山、女嶽、浮嶽などの脊振山系の山々、東は高祖山と今津湾、北と西は玄界灘で画される比較的まとまった地域で、現在の行政区画では糸島市全域と長垂山以西の福岡市西区の一部を含む。

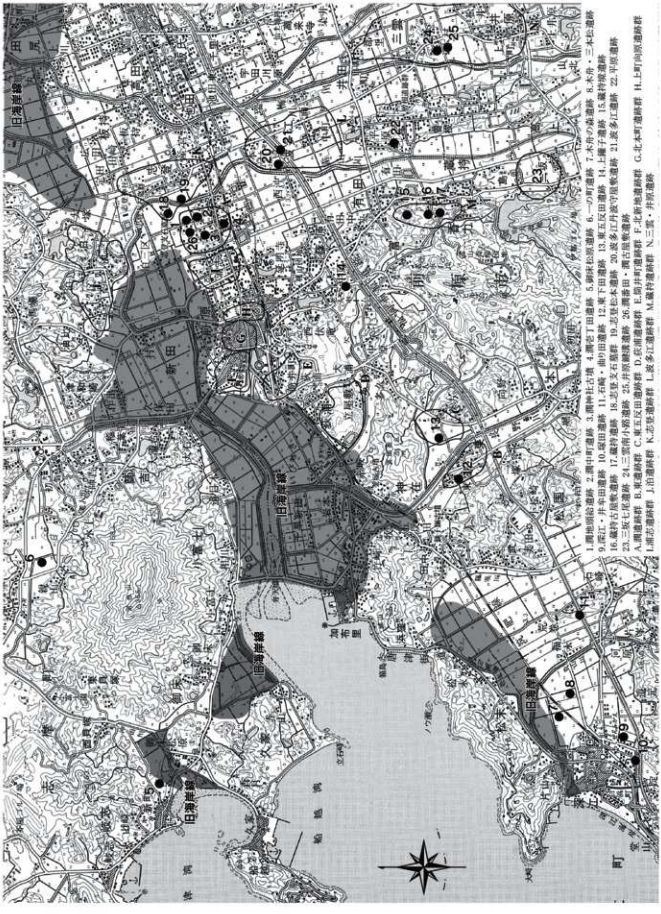
地質的には、高祖山が花崗岩であるほかは、花崗閃緑岩で、低チタンの良質な砂鉄を多く含む。また、雷山山頂から飯場峠付近にかけては三郡変成岩が展開する。可也山や今山では頂上付近に玄武岩があり、後者では弥生時代初頭から前半期にかけて太型蛤刃石斧の材料として用いられた。

主な平野は怡土平野、一貴山・深江平野、糸島低地帯の三ヶ所であるが、糸島低地帯の大半は近世の干拓事業によって形成された新しい平野である。怡土平野には雷山および井原山の裾部から舌状に延びる数本の段丘があり、平原遺跡などは中位段丘に所在する。今回報告する三雲・井原遺跡は市の中央を東西に横断する国道202号線から、南へ約３㎞の場所に位置する。瑞梅寺川水系の瑞梅寺川と川原川に挟まれた標高30 ～ 44ｍの肥沃な扇状地上にあり、集落域と墓域を含めた遺跡の規模は南北約1,500ｍ、東西約750ｍの平面二等辺三角形状を呈し、面積は約60haと推定される。

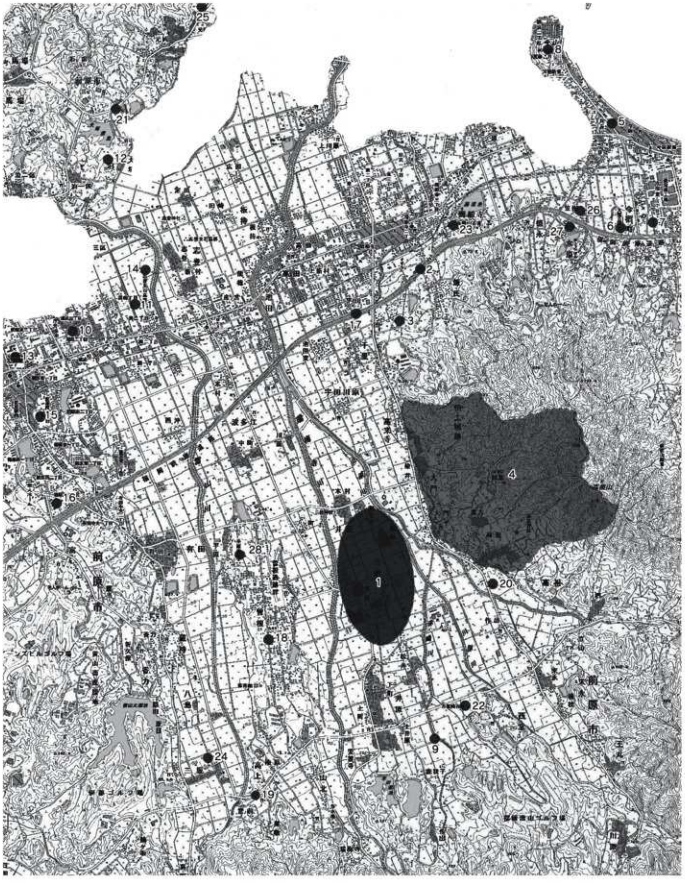
Ⅱ．歴史的環境

１．糸島地域の歴史的環境

わが国における弥生時代の始まりは博多湾を中心とする玄界灘沿岸地域で確認できるが、縄文時代後・晩期にも一定の遺跡の展開がみとめられる。特に、のちの伊都国の王都と位置付けられる三



第2図　糸島地域主要遺跡分布図



1.三雲・井原遺跡
2.飯氏遺跡
3.飯氏二塚古墳
4.恰土城跡
5.今宿遺跡
6.今宿大塚古墳
7.今宿五郎江遺跡
8.今山遺跡
9.井原1号墳
10.浦志遺跡
11.潤地頭給遺跡
12.御道具山古墳
13.上町向原遺跡
14.志登支石墓群
15.篠原新建遺跡
16.上鋤子遺跡
17.馬船寺遺跡
18.銚瓶塚古墳
19.高上石町遺跡
20.高祖樓町遺跡
21.治リュウサキ遺跡
22.西宮古賀崎古墳
23.丸隈山古墳
24.三坂七尾遺跡
25.元岡桑原遺跡
26.山ノ鼻1号墳
27.若八幡宮古墳
28.平原遺跡

第3図　三雲・井原遺跡を中心とした遺跡分布図

雲・井原遺跡においては、その北東部に位置する石橋地区やサキゾノ地区で長期間にわたる遺跡の形成が確認されており、弥生時代の遺跡形成との継続性の有無等の確認が必要である。当期における継続的な遺跡の形成は三雲のほかに福岡市西区周船寺や大原で認められ、短期的なものとしては広田遺跡や大坪遺跡、岐志元村遺跡などが存在する（宮地2012）。

弥生時代開始期の集落遺跡はこれまで曲り田遺跡のほかには集落跡が確認されていなかったが、近年では上深江小西遺跡から５棟の掘立柱建物、石崎大坪遺跡２次調査で水田跡が確認され、糸島西部の石崎遺跡群周辺が初期農耕の拠点であったことが明らかにされつつある。墳墓は新町遺跡、長野宮ノ前遺跡、志登支石墓群などで支石墓や甕棺墓、土壙墓が確認され、三雲・井原遺跡においても加賀石地区や石ヶ崎地区で同時期と思われる支石墓が認められ、副葬品として柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉が出土している。

弥生時代前期になると上深江海老ノ峯遺跡で２軒の円形住居跡が確認されている。板付Ⅱ式から前期末にかけては遺構が増加傾向にあり、甕棺墓は新町遺跡、広田遺跡、今宿遺跡、周船寺遺跡等で確認され、集落は三雲・井原遺跡のほかに周船寺遺跡10次調査で板付Ⅱａ段階の溝、13次調査で円形と方形の住居跡が８軒検出されている。三雲・井原遺跡の南方に位置する横枕地区で板付Ⅱａ段階の掘立柱建物が確認されている。また、東縄手遺跡では丘陵を直線的に切る幅2.0ｍ、深さ1.5ｍのＶ字溝と円形住居跡が確認されている。

弥生時代中期の墳墓は久米遺跡、広田遺跡、木舟三本松遺跡、篠原新建遺跡、三坂七尾遺跡、高上石町遺跡、潤地頭給遺跡で甕棺墓が確認されている。特に潤地頭給遺跡では370基もの甕棺墓が検出され、糸島地域で最大規模の密度を誇る。また、久米遺跡６号甕棺墓で細形銅剣、同23号甕棺墓で細形銅戈、潤地頭給遺跡299号甕棺墓で円環型銅釧５点などのように、副葬品をもつ墓も散見される。三雲・井原遺跡では出土状況等は不明ながらも井原赤崎遺跡で細形銅剣が１点出土しており、他の事例を参照すると甕棺墓や木棺墓などの墳墓の副葬品と考えるのが自然であろう。

中期の集落は御床松原遺跡、一の町遺跡、泊リュウサキ遺跡、元岡・桑原遺跡、今宿五郎江遺跡などで確認されている。御床松原遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心とした集落で、海に面するという立地から土錘や石錘などの漁労関係の遺物が多いが、貨泉や半両銭、後漢鏡片など一般集落では見られない遺物も含まれていることから、糸島地域の対外交流の玄関口＝海村との認識も示されている（武末2009）。また、一の町遺跡は弥生時代中期前半～後期初頭を中心とする集落で、掘立柱建物25棟以上、住居跡５軒以上が検出されている。特筆されるのは大型の掘立柱建物で、身舎面積が概ね50㎡を超えるものが４棟あり、最大の１号大型建物は95.2㎡を測る。今宿五郎江遺跡では掘立柱建物を中心とする集落が営まれている。

弥生時代後期に入ると北部九州全域で甕棺墓は激減するが、糸島地域は数を減らしながらも継続的に甕棺墓が営まれる。ただ、墓群を形成するのは、三雲・井原遺跡のほかに神在遺跡、福岡市西区飯氏遺跡など少数で、単独墓が増加する傾向になる。そのような中、頸部を打ち欠く壺を組み合わせた飯氏遺跡７号甕棺では雲雷文内行花文鏡が出土し、近年、実態が明らかとなった唐津市桜馬場遺跡の上甕も糸島型とされる（久住2017）。また、甕棺墓と併行して木棺墓、土壙墓も確認され、弥生時代終末期～古墳時代初頭には箱式石棺墓が出現する。潤地頭給遺跡Ⅰ－Ｅ区土壙墓（木棺墓

の可能性もあるが、攪乱が著しく詳細不明）でも内行花文鏡と翡翠勾玉が出土している。

後期の集落は中期から継続する御床松原遺跡、一の町遺跡、今宿五郎江遺跡のほか、吉井水付遺跡、曲り田遺跡、志登遺跡群、上鑪子遺跡などで確認される。一の町遺跡では弥生時代後期後半の身舎面積100㎡を超える２号大型建物が検出されている。吉井水付遺跡では後期後半の住居跡４軒が確認され、包含層からは鏡片３点、青銅製鍋先、Ｌ字形石杵などが出土している。上鑪子遺跡では後期初頭から後半の住居跡が42軒確認され、湧水を伴う谷部からは大量の木製品が出土している。なお、遺構の再検討から志登遺跡から三雲・井原遺跡に向かう道路の存在が指摘されたが（久住1999）、近年、やや離れた東高田遺跡でも弥生時代後期前半の道路状遺構の存在の可能性が指摘された（岡部2010・2013）。今後は比恵・那珂遺跡で確認されているように、調査段階での検出・検討が必要である。

また弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては、三雲・井原遺跡のような拠点集落と御床松原遺跡のような海浜部の遺跡で、三韓系や楽浪系などの朝鮮半島系土器が出土しており、弥生時代の糸島地域が果たした対外交流の窓口としての役割を示す資料として重要である。

２.三雲・井原遺跡の歴史的環境

⑴これまでの調査

①三雲・井原遺跡調査前史

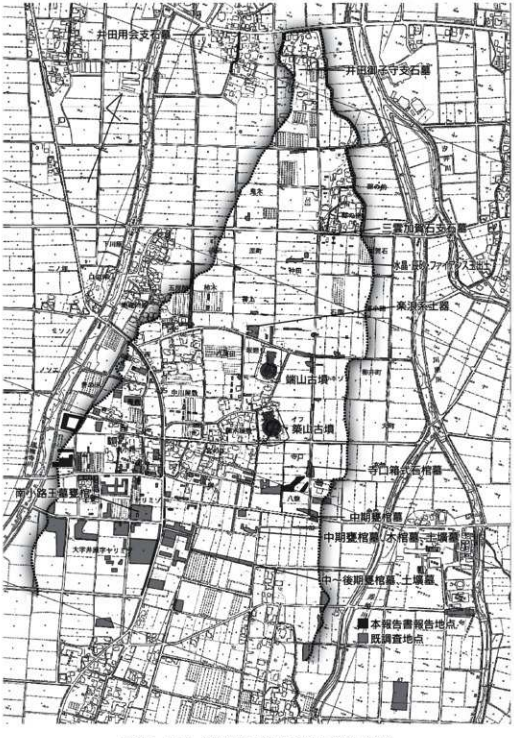
現在、発掘調査の成果から、三雲・井原遺跡が『魏志』倭人伝に記される「伊都国」の中心集落であることが判明しているが、それ以前は、記録に基づく検証で、新井白石や本居宣長による伊都国の故地の検討が行われた。

考古資料に基づく研究の始まりは、福岡藩士である青柳種信の『柳園古器略考』が位置付けられる。その中の「三雲古器図考」に、文政５（1822）年に、現在確認されている最古の伊都国王墓である三雲南小路遺跡発見の経緯と出土品の模写・拓本が収められている。特に３尺（約90㎝）掘り下げると鋒を上にした銅剣があり、その下に逆さまにした朱入の小壺を置き、さらに下から横に寝かせた甕棺が出土したという記述から、現在は削平されている墳丘が、本来は高さ１ｍ程度あったことがわかる点は重要である。

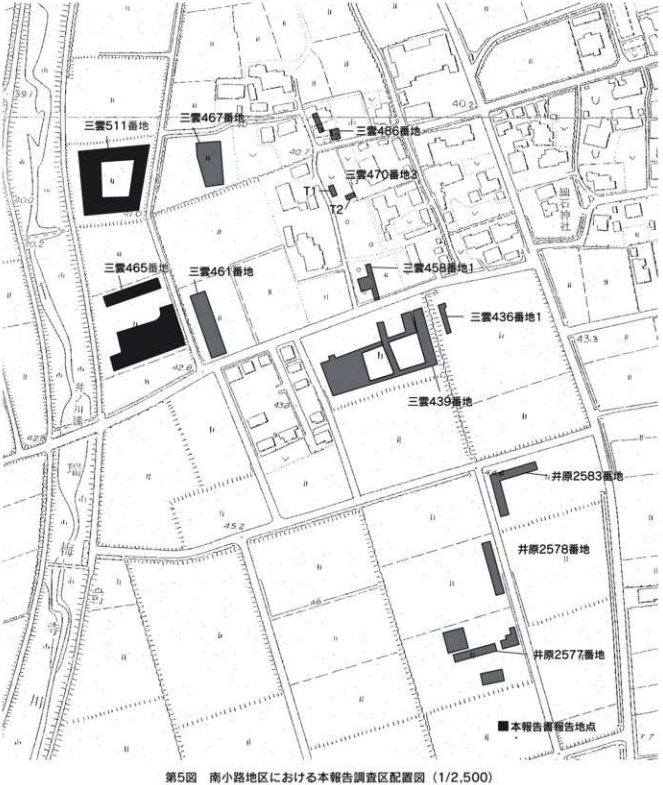
また、同書に収められた「同郡井原村所穿出古鏡図」には天明年間（1781－1788年）に三雲村と南接する井原村の地境にあたる鑪溝で、水田の水口の掘削中に、壺に納まった古鏡21面等が発見された経緯等を聞き取り、出土品については拓本とともに説明を加えている。なお、井原鑪溝遺跡については、出土品が散逸し、遺跡の所在地も不明となっていることから、この記録が遺跡を知るうえで欠かせないものとなっている。

その後、大正期に入ると、中山平次郎が青柳種信の『筑前国続風土記拾遺』で「産神細石社の西半町田間」という記述をもとに現地踏査を行い、不明となっていた三雲南小路遺跡の所在地を推定している（中山1923）。また、戦後すぐの昭和23年の石ヶ崎支石墓の発掘調査などを契機とし（原田1952）、原田大六による伊都国の研究が本格化する。

②三雲・井原遺跡における本格的調査の開始（県営圃場整備に伴う調査）



第4図　三雲・井原遺跡調査区配置図（1/8,000）



第5図　南小路地区における本報告調査区配置図（1/2,500）

三雲・井原遺跡の本格的な発掘調査は昭和49年度から始まる三雲地区圃場整備事業に伴うもので、福岡県教育委員会が主体となって実施した。その成果は非常に大きく、所在地が不明となっていた三雲南小路遺跡の再確認（1号甕棺）とともに、2号甕棺の発見、多量の銅鏡の出土など、弥生時代の王墓の様相が明らかにされたことは特筆されるが、遺跡全域にトレンチを設定することで、三雲・井原遺跡の概要が把握された成果は非常に大きい。なお、これらの成果は5冊の文化財調査報

告書にまとめられている。

井原地区においても昭和56年から始まる県営圃場整備事業に伴い昭和55年～平成２年度まで発掘調査が実施され、弥生時代から古墳時代の集落・墓地の様相が明らかにされ、のちに行われる三雲・井原遺跡の発掘調査のための基礎資料を得ることができた。

③三雲・井原遺跡における調査の進展（発掘調査指導委員会設置以後）

三雲・井原遺跡の発掘調査は三雲・井原地区以外の県営圃場整備や大規模開発の対応により、一時期中断していたが、平成６年度から前原市教育委員会が主体となり、国庫補助事業の重要遺跡確認調査として再開した。平成８年度には三雲遺跡等発掘調査指導委員会（のちに三雲・井原遺跡等発掘調査指導委員会、以後、指導委員会と省略）を組織し、調査指導を受けつつ計画的に発掘調査を実施した。その結果、三雲南小路王墓の範囲の確定、井原ヤリミゾ地区における有力者層の墓群の確認、三雲下西地区における方形区画溝の確認、三雲番上地区における楽浪系土器を多量に含む土器溜りの規模の確認と長方形板石硯の出土など大きな成果を上げることができた。

それらの成果をうけて、平成28年度末に国史跡指定の意見具申を行い、平成29年10月13日の官報告示をもって三雲・井原遺跡が国史跡に指定された。今後は伊都国の王都である三雲・井原遺跡を後世に伝えていくために、地域の住民と一体になった遺跡の保護と活用が求められる。

⑵遺跡の概要

弥生時代以降の三雲・井原遺跡では継続的に遺構が形成される。

弥生時代初頭には、西北九州で支石墓が確認されるが、三雲・井原遺跡の北側には井田用会支石墓、井田御子守支石墓、三雲加賀石支石墓が築かれる。これら支石墓の上石はいずれも２m前後の大型で、大型柳葉形磨製石鏃や碧玉製管玉が副葬されるなど、一般的な支石墓とは異なることから、特定個人墓の萌芽と考えられる（柳田2002）。集落も加賀石地区で弥生時代前期中ごろの円形住居が確認されるなど、遺跡の北側に居住域・墓域ともに形成されている（角2013）。

弥生時代前期末からは、今山遺跡での両刃石斧の生産・流通が本格化し、北部九州の広い範囲で確認されるようになる。この石斧流通の管理主体が三雲・井原遺跡の首長にあり、再配分される過程で形成された流通網を活かして、大陸・半島文化の受容の窓口としての役割を果たすとともに、王墓に位置付けられる三雲南小路遺跡の出現の契機となったとする見解もある（武末1993）。

この三雲南小路遺跡は一辺30m以上の方形プランの墳丘墓で、そのやや南寄りに２つの甕棺を埋葬する。１号甕棺は江戸時代に発見されたもので、『柳園古器略考』に記載分と発掘調査時の出土分を合わせて、有柄中細銅剣、銅戈、朱入り小壺とともに、銅鏡35面、ガラス璧、銅矛、勾玉、管玉、金銅四葉座飾金具などが副葬されていた。２号甕棺は調査時に新たに確認されたもので、盗掘を受けているので全容の把握は難しいが、銅鏡22面以上、勾玉、管玉などが出土している。このように傑出した副葬品と墳丘をもつ特定個人墓であることから、王墓と位置付けられている。なお、近年の調査では三雲南小路遺跡の北東側にあるヤリミゾ428・429番地の調査でL字形に屈曲する区画溝が確認されており、王墓との関連性が注目される。

北部九州では、弥生時代後期になると甕棺墓が減少していくが、糸島地域では甕から壺へと姿を

変え、古墳時代前期まで土器棺墓が継続する。後期の壺棺は、江戸時代に発見されて以降、所在地が分からなくなって「幻の王墓」ともいわれる井原鎖溝遺跡にも採用されている。出土遺物で現存するものはないが、記録から銅鏡19面（江崎2013）、巴形銅器、「刀剣の類」「鎧の如きもの」などが「壺」から出土したことがわかる。遺跡の時期は鏡の拓本や図から推測されているが、弥生時代後期初頭～後期後半まで見解が分かれている。

なお、木棺墓、土壙墓も後期を中心に確認され、後期後半から古墳時代初頭には箱式石棺墓が出現する。三雲寺口遺跡では、L字状の祭祀土坑区画内に箱式石棺墓が２基確認されている。攪乱から内行花文鏡片が出土しているが、磨滅がほとんど見られないことから本来は完形の状態で２号箱式石棺墓に副葬されたものと考えられる。井原ヤリミゾ遺跡では木棺墓に副葬・供献される内行花文鏡や方格規矩鏡が確認されている。

弥生時代は集落の周縁部に墓域が形成される傾向にあったが、古墳時代前期になると、弥生時代に形成された集落域の状況が変化する。盾形の周溝をもつ前方後円墳である端山古墳、築山古墳がこれまでの集落の中心地に築かれ、その周辺に集落が展開するようになり、古墳時代中期以降、集落が次第に南側へ移動していく。

なお、本書は三雲・井原遺跡関係の31冊目の調査報告書となる。　（平尾）

【三雲・井原遺跡関連報告書一覧】

（福岡県教育委員会）

柳田康雄編1980『三雲遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書第58集

柳田康雄・小池史哲編1981『三雲遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第60集

柳田康雄・小池史哲編1982『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第63集

小池史哲編1983『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集

柳田康雄編1985『三雲遺跡　南小路地区編』福岡県文化財調査報告書第69集

（前原市（町）・糸島市教育委員会）

川村　博編1982『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第８集

川村　博編1983『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概報』前原町文化財調査報告書第10集

川村　博編1984『三雲遺跡Ⅰ』前原町文化財調査報告書第13集

川村　博編1985『井原遺跡群Ⅲ』前原町文化財調査報告書第19集

川村博・林覚・岡部裕俊・石井扶美子1985『井原遺跡群Ⅳ』前原町文化財調査報告書第21集

林　覚編1986『井原遺跡群Ⅴ』前原町文化財調査報告書第24集

岡部裕俊編1987『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第25集

林　覚編1988『井原遺跡群Ⅶ』前原町文化財調査報告書第30集

林　覚編1990『井原遺跡群Ⅷ』前原町文化財調査報告書第32集

岡部裕俊編1991『井原遺跡群』前原町文化財調査報告書第35集

林　覚編1992『井原塚廻遺跡』前原町文化財調査報告書第38集

岡部裕俊編1994『井原地区周辺の古墳群』前原市文化財調査報告書第51集

角　浩行編1996『三雲・井原遺跡群調査概要Ⅰ』前原市文化財調査報告書第62集

角　浩行編1997『三雲・井原遺跡群Ⅰ』前原市文化財調査報告書第63集

牟田華代子・岡部裕俊編2002『三雲・井原遺跡Ⅱ』前原市文化財調査報告書第78集

牟田華代子編2003『三雲・井原遺跡Ⅲ』前原市文化財調査報告書第82集

岡部裕俊編2003『井原１号墳』前原市文化財調査報告書第83集

平尾和久編2004『三雲・井原遺跡Ⅳ』前原市文化財調査報告書第86集

岡部裕俊・牟田華代子編2006『三雲・井原遺跡Ⅴ』前原市文化財調査報告書第90集

江崎靖隆・櫛崎直子編2006『三雲・井原遺跡』前原市文化財調査報告書第92集

江崎靖隆編2010『三雲・井原遺跡Ⅵ』糸島市文化財調査報告書第１集

江崎靖隆編2012『三雲・井原遺跡Ⅶ』糸島市文化財調査報告書第７集

平尾和久編2013『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

平尾和久編2014『三雲・井原遺跡Ⅸ』糸島市文化財調査報告書第13集

江崎靖隆編2017『井原久保園遺跡』糸島市文化財調査報告書第14集

【参考文献】

江崎靖隆2013「井原鑓溝遺跡」『三雲・井原遺跡Ⅶ』糸島市文化財調査報告書第10集

岡部裕俊2010「長野川流域の弥生～古墳時代の遺跡と遺物　－東地区周辺の遺跡と博物館収蔵資料から－」『伊都国歴史博物館紀要』５

岡部裕俊2013「伊都国の王と有力者たち」『海でつながる倭と中国』新泉社

久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』74

久住猛雄2017「楯築墓の成立の意義」『楯築墓成立の意義』考古学研究会例会シンポジウム記録11

角　浩行2013「総括」『三雲・井原遺跡Ⅶ』糸島市文化財調査報告書第10集

武末純一1993「交易はどのようにおこなわれたか」『新視点日本の歴史』１原始編

武末純一2009「三韓と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』151

中山平次郎1923「三雲字南小路に於ける特殊埋蔵物発掘地点」『考古学雑誌』13巻９号

原田大六1952「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』38巻４号

宮地聡一郎2012「縄文後・晩期の遺跡群動態」『古代文化』64－Ⅰ

柳田康雄2002『九州弥生文化の研究』学生社

第３章　調査の記録

Ⅰ．南小路地区465番地

１．調査の概要

本調査は、平成24年度から継続する三雲・井原遺跡の南西側の範囲確認を目的とする重要遺跡確認調査である。前年度の調査では南北に延びる大溝とともに、調査区の西端まで遺構が広がることが判明したため、より西側の調査の必要性が高まった。そこで、南小路461番地の西側に当たる南小路465番地の調査を実施した。

調査区は遺跡の広がりを確認することを目的としたので、東西に長いトレンチを遺跡の南北に設定した。南側のトレンチでは遺跡の端部と考えられる段落ちを検出したが、東寄りの部分から大溝が確認されたので、その延長方向を確認するために北側に調査区を拡張した。北側のトレンチでは段落ちがより東側で確認された。

遺構面は南側トレンチでは耕作土直下（現地表面から約20cm下）から確認され、大溝、土坑、甕棺墓、掘立柱建物のほかに、前述した段落ちが検出された。北側トレンチでは、本来、別の水田であったものを嵩上げして一面の水田にしたため、遺構検出面は低く、現地表面から１ｍほど下で土坑や溝などの遺構を確認した。

なお、本調査は保存を前提とした内容確認の調査であるため、主として平面プランの確認を行い、遺構の掘り下げは最小限にとどめた。調査面積は1,133㎡、調査期間は稲刈り終了後の平成25年11月１日から行い、平成26年３月31日に終了した。

また、南小路465番地の調査と併行して、水田を一枚隔てた井ノ川511番地の調査も実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。瑞梅寺川の氾濫原であると考えられ、遺構は東接する南北道路までで終わっていると判断される。

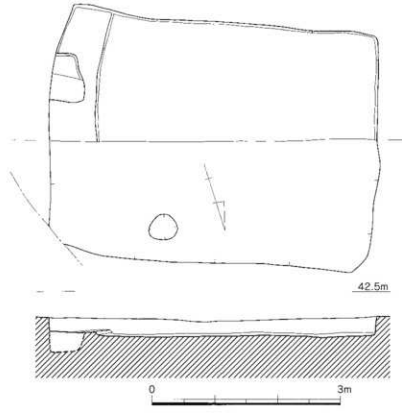
２．遺構と遺物

⑴住居跡

１号住居跡（第６図）南側調査区の東端部で確認された方形の住居跡で、長軸5.22ｍ、短軸3.84ｍを測る。検出面から30cmほどで床面に達する。東辺壁際にはベッド上の高まりがあり、そのやや南寄りには土坑がある。出土遺物は小片が多いがいずれも弥生時代中期後半ころのものが多い。

出土遺物（第７図）１は鼎先状を呈する口縁部の小片である。口縁部はやや跳ね上げ気味で、端部は丸く収める。内面は丹塗りであるが、外面は状態が悪く丹塗りか否か不明である。壺、もしくは高坏の口縁部である。２は無口壺の上半部である。やや跳ね上げ気味の口縁部をもち、胴の張りは弱い。口縁上面と内面に丹塗りを施す。３は壺の底部である。平底で、外面にハケ、内面に不定方向のナデを施す。外面には丹塗りが認められる。４・５は甕の底部で平底である。４は外面にハケ、５は内外面ともにナデを施す。６と７は高坏の脚部である。６の端部付近を屈曲させ、端部を丸く収める。内外面ともに丹塗りである。７は６よりやや小型の脚部で、ラッパ状に広がる。端部は丸く収め、外面に縦方向のミガキ、内面にナデを施す。８は碗形の坏部をもつ高坏で口縁下に方形突

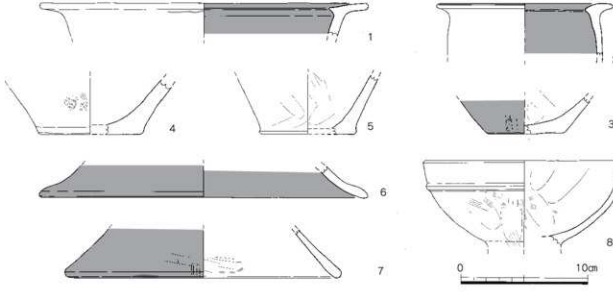
帯を一条巡らせる。外面にはハケ、内面にはハケとナデを施す。類例は吉野ヶ里遺跡や上鑵子遺跡で認められるが、それらには丹塗りとミガキ、暗文状のミガキが認められるものの、本例では認められないことから、やや粗製の高坏といえる。これらから１号住居跡は弥生時代中期末～後期初頭に位置付けられる。



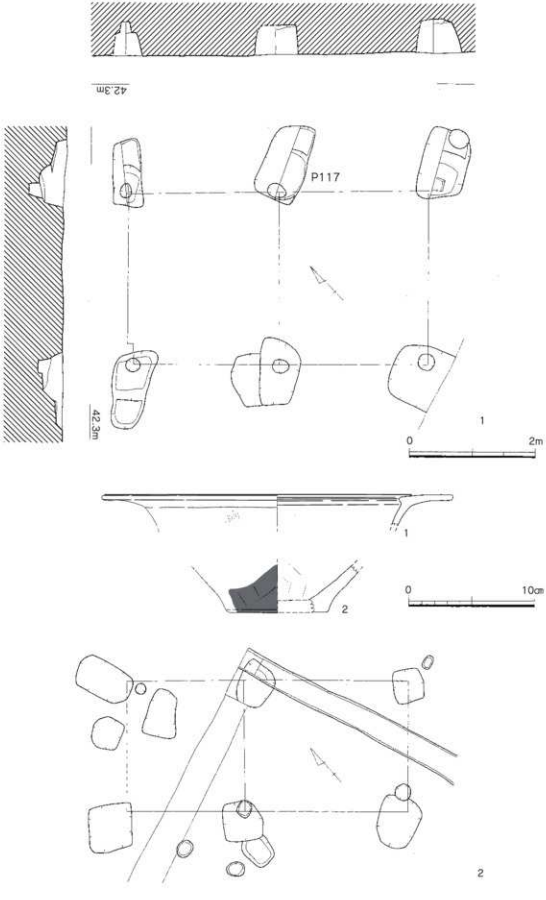
第6図　三雲南小路465番地1号住居跡実測図（1/60）

⑵掘立柱建物

１号掘立柱建物（第８図１）遺跡の西端である段落ちから約９ｍ東に位置する１間×２間の建物である。主軸を北西－東南方向にもつ。個々の柱穴の平面は120㎝×60㎝程度の隅丸長方形を呈する。北側に位置する３つの柱穴を半裁し、断面を確認したが、いずれ



第7図　三雲南小路465番地住居跡出土遺物実測図（1/3）



第8図　三雲南小路465番地1号・2号掘立柱建物実測図、出土遺物実測図（1/60・1/3）

も二段掘で根石を持つものもあった。柱は直径30cmほどである。

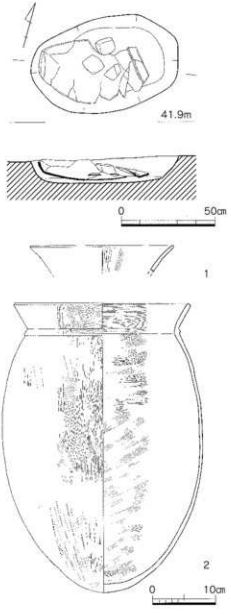
出土遺物（第８図１・２）半裁した117号柱穴より２点の弥生土器が出土した。１は高坏の口縁部で断面鋤先状を呈する。器壁は薄く、口縁部上面に丹塗りを施す。２は甕の底部である。中央部を欠くが平底で、やや外反しながら立ち上がる。

２号掘立柱建物（第８図２）１号掘立柱建物の東側３ｍの地点に位置する１間×２間の建物である。主軸は北西－東南方向にもち、１号掘立柱建物と主軸を合わせたものと思われる。２号掘立柱建物は平面確認のみであるが、平面方形～長方形の柱穴からなる。

⑶甕棺墓

１号甕棺墓（第９図）

南側調査区北東部で確認された小児棺である。甕棺墓は標高41.7ｍ付近で確認されたが、上半分は削平をうける。墓壙は東西方向に長軸をもつもので楕円形を呈し、長軸0.78ｍ、短軸0.52ｍ、深さ0.13ｍを測る。中からは甕と高坏が出土している。ただ、出土状況からは高坏が上甕とは判断できず、本報告では甕を用いる単棺としておく。副葬品はなく、赤色顔料も認められない。



第9図　三雲南小路465番地1号甕棺墓実測図・甕棺実測図（1/20・1/6）

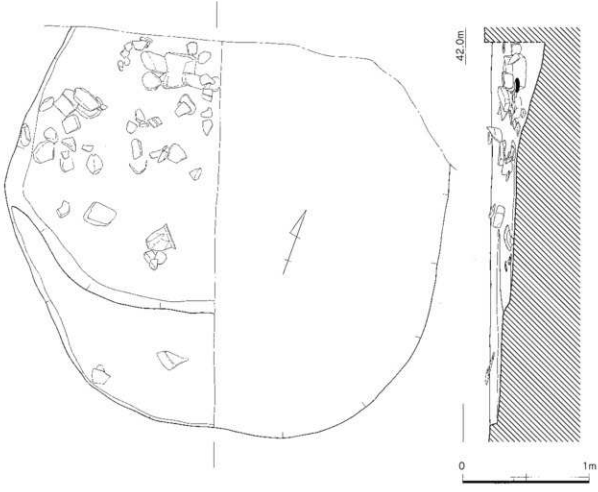
１は高坏の口縁部である。口径は22.8cmで、内湾しながら立ち上がり、端部を丸く収める。内外面ともに暗文状の縦ミガキを施す。

２は長胴の甕である。尖り気味の丸底から、丸みを持ちながら立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は断面「く」字状で、三角突帯を巡らせる。口縁端部の断面は方形である。外面は縦ハケののちに、底部からの擦過状のナデ、内面は横ハケを施す。

⑷土坑

１号土坑（第10図）

南側調査区の北端部で確認された土坑である。平面プランの確認段階では円形住居と判断し、大溝の外側にある意義を確認するために半裁して西側を掘り下げたところ、出土した土器が弥生時代後期のものであること、および、遺構の断面が中央に向かって深くなることから、土坑と判断した。



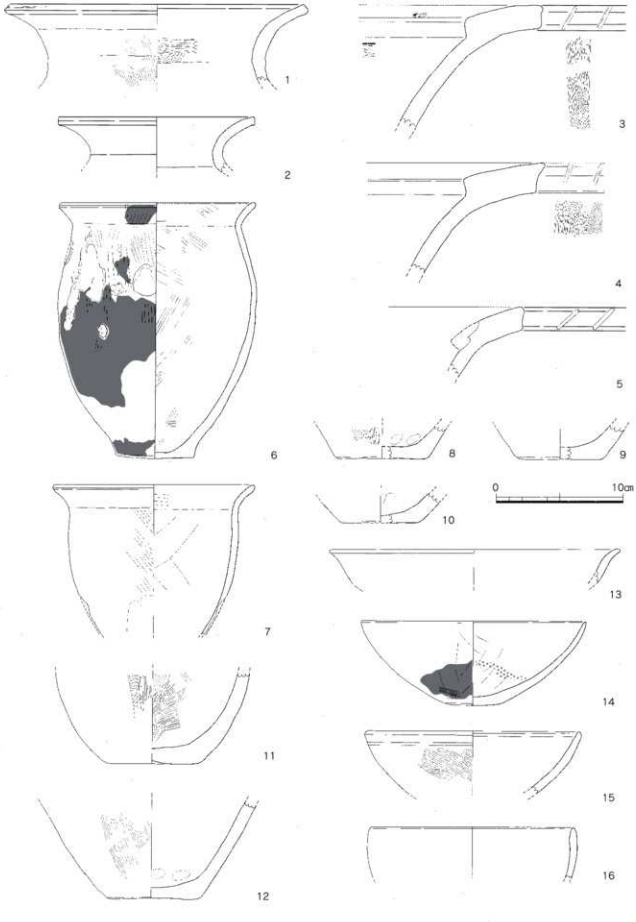
第10図　三雲南小路465番地1号土坑実測図（1/30）

北側が調査区外に延びているが、現状で長軸3.10m＋α、短軸3.53m、深さ0.42mを測る。土坑は南端部から北に向って10cm程度と浅い状態が続くが、南端部から0.90mの箇所に段があり、以降北に向かって緩やかに深くなる。最も深い箇所が調査区と接する北端であることから、遺構は調査区外に大きく広がるものと考える。遺物は一段深くなっている北寄りの部分から多く出土している。

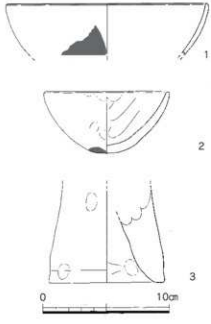
出土遺物（第11～12図）

第11図1～5は壺である。1は土坑中央部やや南側から出土した頸部のしまりが緩くなった広口壺である。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。2も1と似た壺であるが、頸部はやや締まり、口縁端部の調整は丁寧に行う。3～5は大型の鋤先口縁壺である。いずれも径を復元できるほどの大きさがないので断面のみを図化した。3は土坑の西端部から出土したもので、口縁に粘土帯を足して肥厚させる。口縁端部には刻目を施す。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。4は土坑の南側から出土した壺の口縁部である。粘土帯を張り付けた口縁部はやや内傾し、その端部はすこしつまみ出す。口縁端部には刻目を施す。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。5は土坑の中央部北寄りから出土した壺の口縁部である。内傾化が著しく、口縁端部に斜めの刻目を施す。

6～12は甕である。6は土坑のやや南側から出土した甕で、1と7の北側で検出された。完形



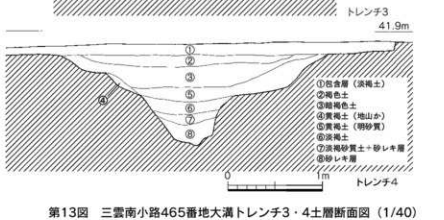
第11図　三雲南小路465番地1号土坑出土遺物実測図①（1/3）



第12図　三雲南小路465番地1号土坑出土遺物実測図②（1/3）

に復元される甕で、弱い凸レンズ底から内湾しつつ立ち上がり、胴部中位に最大径をもつ。頸部断面はゆるい「く」字状を呈し、内外面ともに弱い稜が入る。口縁端部は丸く収める。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。また、外面の広い範囲にススが付着し、甕の上半部には剥離した部分が多くみられる。7は土坑中央部やや南寄りから出土した甕である。頸部は緩く締まり、内外面ともに弱い稜線が入る。口縁の端部は丸く収め、頸部を経て、張りのない胴部に至る。胴部下半は剥離が著しい。外面に斜ハケ、口縁部内面に横ハケ、胴部内面はナデを施す。8～10は甕の底部である。8は平底で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9・10も平底で内外面ともにナデを施す。11は土坑の北端部西寄りで出土した甕の下半部である。底部中央が窪み、器壁が厚い。外面に縦ハケ、内面に斜ハケを施す。12は土坑北端中央部で出土した平底の甕で、外傾しながら立ち上がる。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。

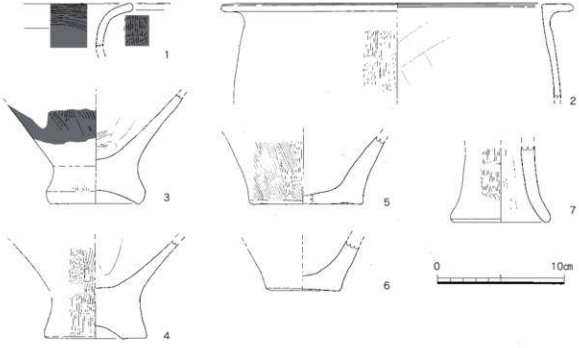
13は高坏の坏部片で、反転して立ち上がる箇所から口縁端部まで残る。反転部は若干肥厚し、端部は丸く収める。14は鉢である。小さな凸レンズ状底から内湾しながら広がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く収める。内外面ともにナデを施す。15は底部を欠く鉢である。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。14の鉢よりも肉厚である。16は丸みを持ちつつ直線気味に立ち上がる鉢で、口縁端部を丸く収める。第12図1は鉢の上半部である。外面にはススを伴う。2は土坑の北端やや西寄りから出土した手捏ねの鉢である。器壁は厚く、口縁端部を丸く収める。3も土坑の北端やや西寄りから出土した器台の脚部である。器壁は厚いが、脚裾部は薄くなる。



第13図　三雲南小路465番地大溝トレンチ3・4土層断面図（1/40）

⑸大溝（第13図）

調査当初、現在の水田の形状に従って、その南側に南北5m、東西42mのトレンチを設定したが、そのやや東寄りの地点で南北方向に延びる大溝状の遺構を確



第14図　三雲南小路465番地大溝トレンチ1出土遺物実測図（1/3）

認した。そこで溝か否かを確認するためにトレンチの北辺と南辺に沿って幅１mのサブトレンチを設定したところ、幅３m程度、深さ１mの大溝であることが判明した（南からトレンチ１・２）。この大溝の延長方向を確認するためにトレンチを北側に拡張し、まず、平面的に大溝のプランを確認すると、トレンチ１・２が大溝に斜交して設定していたことが明らかとなったため、直交するかたちで４本のトレンチ（南からトレンチ３・４・５・６）を設定して、土層断面図を作成した。

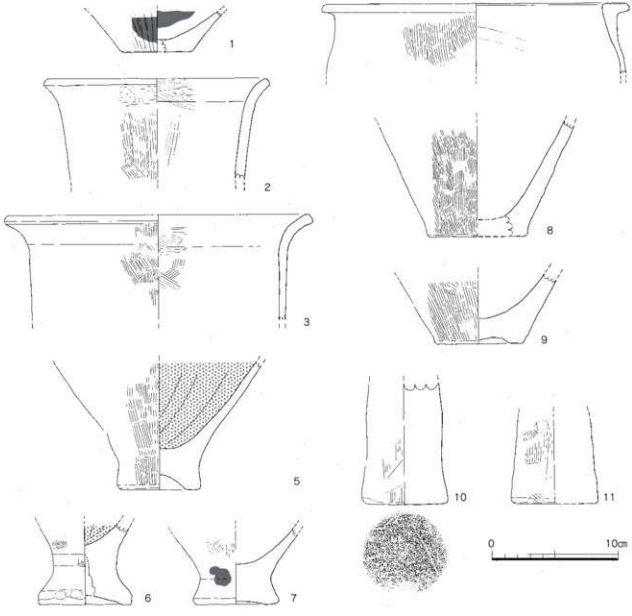
大溝は幅３m、深さ１mで、南西～北東へと延びるもので、調査区内で28m確認された。断面は二段の逆台形状を呈し、最下層が窪む。土層は上半が褐色～黄色褐色を呈するもの、下層が砂礫を含んでいることから、実際に流路として機能したものと思われる。

出土品は土器と石器で、検出面から20 ～ 30cm下の暗褐色土層と最下層の砂礫層からの出土が多い。

出土遺物（第14 ～ 22図）

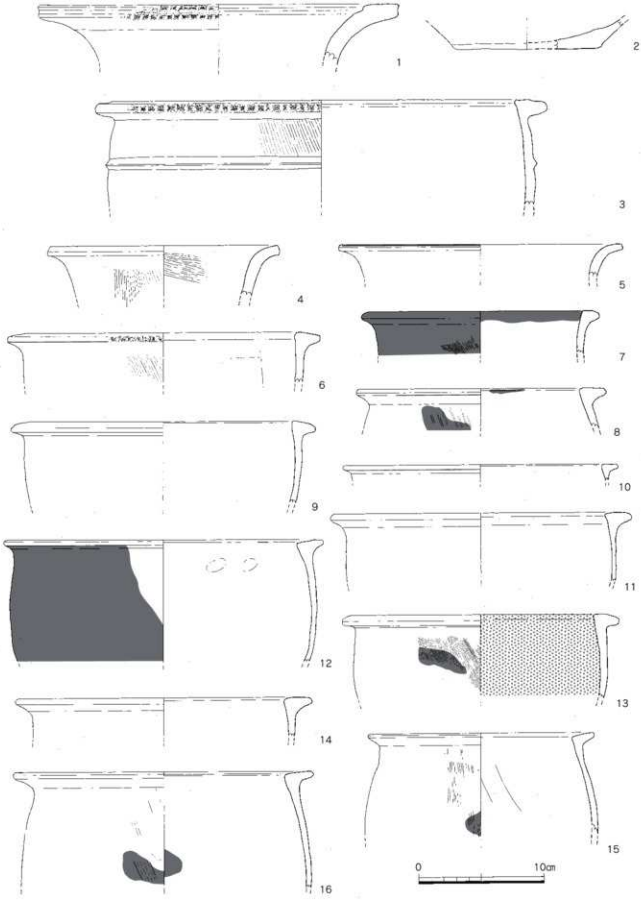
第14図は大溝トレンチ１出土品である。１は如意形口縁の甕の口縁部である。口縁部内面に横ハケメ、外面に縦ハケメが認められる。内外面ともにススが付着し、黒色化する。２は甕の上半部である。口縁部は水平に広がり、端部は丸く収める。胴部はやや張りをもつ。外面は縦ハケメ、内面は縦ナデを施す。３～６は甕の底部である。３は上げ底であるが、地と接する面は小さい。外面の底部屈曲部と胴と底部の坂には弱い稜がはいる。４も上げ底で、地と接する面が大きい。底部は肉厚で、外面に縦ハケメ、内面にナデを施す。５は平底で、底部中央を欠く。外面は縦ハケメ、内面は板状工具によるナデを施す。６は小型の底部である。内外面ともにナデを施す。７は器台の下半部である。外面に縦ハケメ、内面には絞り痕とナデが認められる。器壁は１cm前後の厚さで推移する。

第15図は大溝トレンチ２出土品である。１は検出面から20cm下の暗褐色土層から出土した壺の底

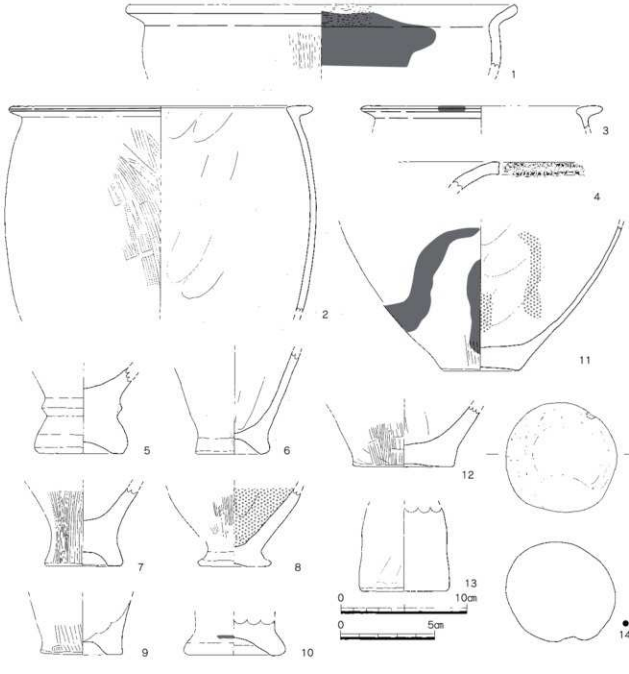


第15図　三雲南小路465番地大溝トレンチ2出土遺物実測図（1/3）

部で中央部を欠くが、平底である。底から広がりながら直線的に立ち上がり、外面に縦ミガキを施す。内面はナデを施す。２～４は甕の上半部である。２も暗褐色土層から出土した甕である。張りのない胴部にやや屈曲する口縁部をもち、器壁は厚い。口縁部内外面ともに横ハケ、胴部は外面に縦ハケ、内面に縦方向のナデを施す。３も張りのない胴部に如意形の口縁部が伴うもので、頸部に弱い稜が入る。内外面ともにハケメを残す。４は暗褐色土層から出土した甕で、張りの強い胴部は肥厚しながら立ち上がり、水平に小さく広がる口縁が伴う。胴部外面に縦ハケメ、内面に横ナデを施す。５～９は甕の底部である。５は上げ底の底部をもつ甕で、暗褐色土層から出土した。底部から２cmほど内湾気味に立ち上がり、胴部に向かい大きく広がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施すが、コゲが全面に付着する。６は最下層である砂礫層から出土した底部で中央部を欠くが緩やかな

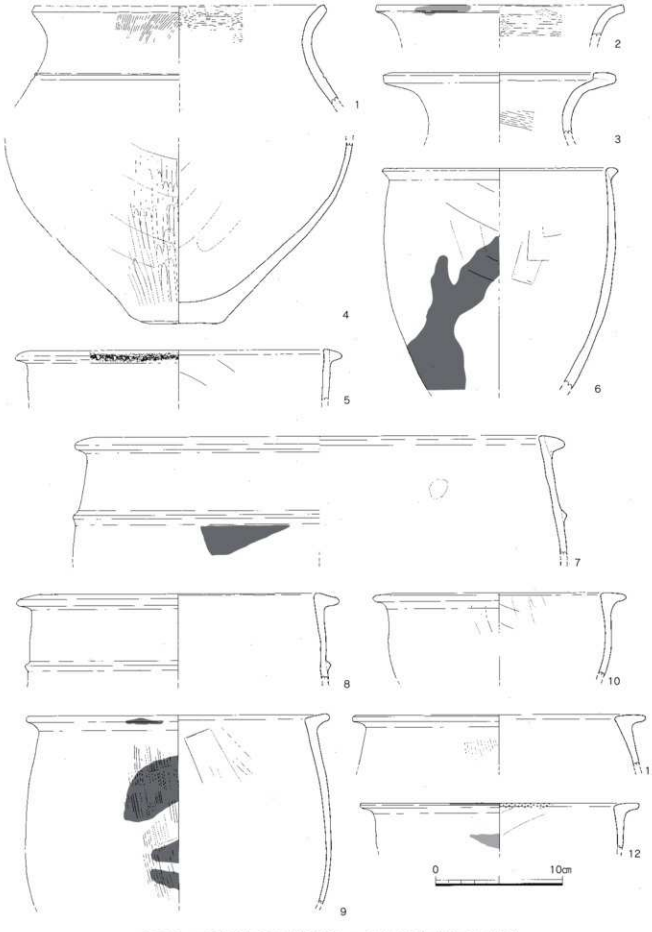


第16図　三雲南小路465番地大溝トレンチ３出土遺物実測図①（1/3）



第17図　三雲南小路465番地大溝トレンチ3出土遺物実測図②（1/3・●は1/2）

上げ底である。底部の裾は大きく広がり、脚柱状に肉厚な底部をもつ。外面に縦ハケ、内面にナデを施すが、内面にはコゲが付着する。7は暗褐色土層から出土した甕底部である。底部の裾は広がるが、上げ底は小さく、平底に近い。底部は肉厚である。立ち上がり部分の器壁は薄く、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。8は暗褐色土層から出土した甕下半部である。底部中央を欠くが平底であろう。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。9は砂礫層から出土した底部片で、肉厚である。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10・11は器台で暗褐色土層から出土した。10は中実の器台で上半部を欠く。外面は縦ハケとナデで調整する。底部裏面にはワラ状の痕跡を残す。11も中実の器台の下半部で、外面に縦ハケを施す。

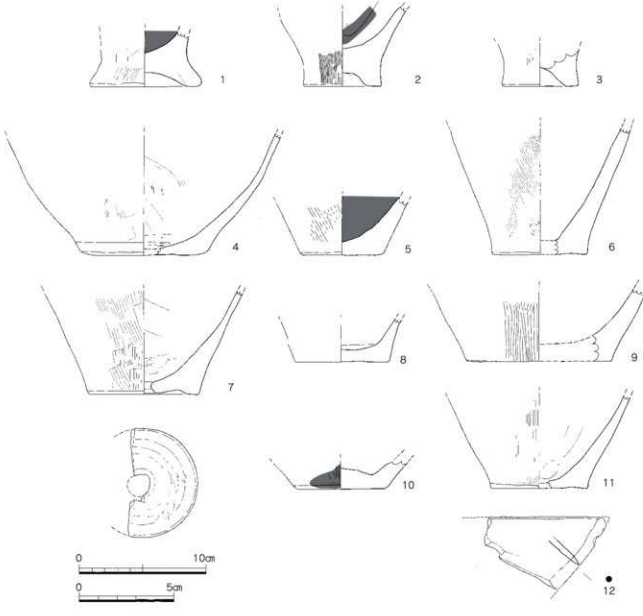


第18図　三雲南小路465番地大溝トレンチ4出土遺物実測図①（1/3）

第16図は大溝トレンチ３からの出土品である。１は広口壺の口縁部で、砂礫層から出土した。口縁上面に粘土を貼り付け肥厚させるため、口縁端部の断面はM字となり、刻目も施す。２は壺の底部で、１と同じ砂礫層から出土した。中央部を欠くが、復元される径は大きい。

３～15は甕である。３はトレンチ３の土器群３から出土した甕の上半部である。若干外傾しつつも、大きく伸びない肉厚の口縁部の下に低い三角突帯を巡らせるもので、口縁端部に刻目を施す。後円部と突帯の間には縦ハケを施す。内面はナデである。胴はやや張る。４は全体的に肉厚な甕の口縁部で、端部断面は方形である。砂礫層から出土した。外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。５も砂礫層から出土した甕の口縁部片で如意形を呈する。６も砂礫層から出土した甕の後円部で断面三角形を呈し、端部に刻目を施す。胴は殆ど張らず、外面に斜ハケ、内面にナデを施す。７はやや砂質の黄褐色土層から出土した甕で、断面三角形の粘土を貼り付け口縁部とする。外面と内面上端部にススが付着する。８は褐色土層から出土した甕で、口縁部断面は三角形で、胴はやや張る。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。胴部の一部にススが付着する。９は甕の上半部で、トレンチ３の土器群２から出土した。口縁部の断面は三角形で、胴の張りは弱い。10は褐色土層で出土した甕の口縁部である。11は甕の上半部である。器壁は薄いが、口縁部は肉厚である。トレンチ３の土器群２から出土した。12は甕の上半部である。砂質を含む黄褐色土層から出土したもので、外面の広い範囲にススが付着する。口縁部はやや内傾する。13は褐色土層で確認された甕で、全体的に肉厚で、口縁部の整形もやや粗い。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。外面の一部と内面全体にコゲが付着する。14はほぼ水平の口縁部をもつ甕で、褐色土層から出土した。15はややや口径の小さい甕で、胴部中位の張りが強い。検出面から砂質をふくむ黄褐色土層から出土したもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。器壁は薄く、口縁部は内傾する。16は口縁部がやや内傾する甕で、口縁端部は丸く収める。外面に縦ハケ、内面にナデを施すが、風化が著しく詳細は不明である。

第17図１～12は甕である。１は大溝トレンチ３崩落部から出土した口縁部片である。口縁は内傾気味に立ち上がる。外面は縦ハケ、内面口縁部に横ハケを施す。内面の広い範囲にススが付着する。２は底部を欠く甕で、ほぼ水平の口縁部をもち、胴部は張りをもつ。３は径の小さい甕の口縁部である。褐色土層から出土した。４は口縁部片で、端部に刻目を施す。小片のため、径は復元できない。５～12は甕の底部片である。５は肉厚な上げ底の底部で、底部端部は広がる。淡褐色砂質土～砂礫層から出土したもので、底部と胴部の境に三角突帯を巡らせる。６も上げ底であるが器壁は薄く、胴部に向かってシリンダー状に立ち上がる。内外面ともにナデを施す。７も肉厚な上げ底の底部であるが、端部の広がりは弱い。暗褐色土層から出土したもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。８は褐色層から出土した小型の甕の下半部である。底部の端は広がるが手捏ね状の整形である。内面にはコゲが付着する。外面は縦ハケ、内面はナデである。９は褐色土層から出土した甕の底部である。上げ底で外面に縦ハケを施す。10は砂礫層から出土した甕の底部である。上げ底で、端部が外に広がるが詳細は不明。11は甕の下半部である。上げ底気味の肉厚な平底から、広がりつつ立ち上がり、張りのある胴部に至る。外面にスス、内面にコゲが見られる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。土器群２より出土。12は上げ底気味の底部で、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。淡褐色砂質土～砂礫層より出土。

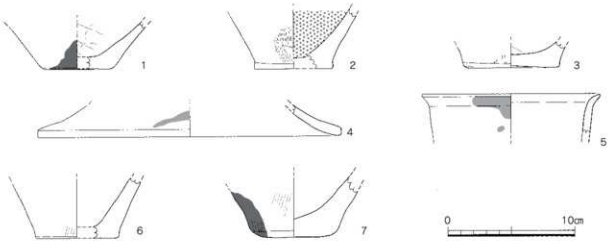


第19図　三雲南小路465番地大溝トレンチ4出土遺物実測図②（1/3・●は1/2）

13は器台の下半部で中実のものである。検出面より０～20cm下の褐色土層より出土。

14は球状の敲打石である。直径5.8cm、重さ292.24ｇを測る。

第18図は大溝トレンチ４出土品である。１～４は壺である。１は淡褐色砂質土～砂礫層から出土した壺の上半部で、頸部から胴部に向かい直線的に広がるが、幅５mm程度の沈線を巡らせ胴頸部の境とする。頸部は如意形に外反し、口縁端部にはナデを施して、断面がM字状に窪む。外面口縁部に斜ハケ、内面口縁部に横ハケを施す。２は砂礫層より出土した広口壺の口縁部である。口縁端部に向かいラッパ状に広がり、端部断面は方形である。外面に横ナデ、内面に横ハケを施す。外面口縁端部の一部に丹が残る。３は淡褐色砂質土～砂礫層から出土した口縁部が未発達の鋤先口縁壺の後円部である。口縁部上面に粘土を貼り付け肥厚させる。頸部は内湾し、その内面に横ハケを施す。

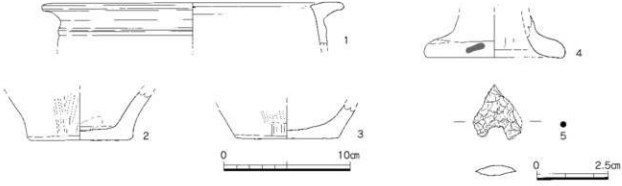


第20図　三雲南小路465番地大溝トレンチ5・6出土遺物実測図（1/3）

4は褐色土層から出土した壺の下半部である。不安定な平底から、やや内湾しながら立ち上がり、張りの強い胴部に至る。外面は縦ハケ、内面なナデを施す。

5～12は甕である。5は断面三角形の口縁をもち、端部に刻目を入れる。6は胴部中位に張りをもつ甕で、口縁断面の形状から無文土器の影響をうけた可能性がある。7はやや砂質の黄褐色土層から出土した大型の甕の上半部である。やや張りのある胴部から内傾しつつ立ち上がり口縁部に至る。その端部には三角形の粘土帯を貼り付け口縁部とする。口縁部下7㎝に位置する胴部最大径の若干上部に低い三角突帯を巡らせる。口縁端部、突帯ともに刻目はない。8もやや砂質の黄褐色土層から出土した甕の上半部である。7と異なり、胴部の張りは弱く、口縁部も伸びる。口縁下には低い三角突帯を巡らせる。9は褐色土層から出土した甕の上半部で、口縁平坦面が内傾する。胴部はその中位に最大径をもつ。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。10は褐色土層から出土した甕の上半部である。口縁部は水平に広がり、胴部の張りは弱い。内外面ともにナデを施す。11も褐色土層から出土した甕の上半部である。胴部から口縁部に向かうにつれて内傾し、ほぼ水平の口縁部が伴う。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。12も甕の口縁部である。胴の張りは弱く、口縁部は若干内傾する。内外面ともにナデを施し、外面に丹、内面にコゲが付着する。

第19図1～11は甕の底部である。1はやや砂質の黄褐色土層で出土したもので、底上げで裾が広がる。外面に縦ハケを施す。内面にはススが付着する。2は褐色土層で出土したもので、外面に縦ハケ、内面にナデを施す。内面にはススが付着する。上げ底で直立気味に立ち上がるが、胴の張りは弱そうである。3は褐色土層から出土したもので、2と同様に上げ底で、直立気味に立ち上がる。外面に縦ハケを施す。4は検出面からやや砂質の黄褐色土層から出土した甕の下半部である。平底で内湾気味に立ち上がり、胴の張りは強い。内外面ともに縦ハケとナデを施す。5は砂礫層から出土した甕で、外面に斜ハケ、内面にナデを施す。平底で直線的に外傾しつつ立ちあがる。6は淡褐色砂質土～砂礫層から出土した甕の下半部である。平底の底部から外傾しつつ立ち上がるが、胴の張りは弱そうである。外面に斜ハケ、内面にナデを施す。7は褐色土層から出土した下半部である。平底で直線的に外傾しながら立ち上がる。外面に縦ハケ、内面にナデを施す。底部中央に直径1.8㎝の焼成前穿孔を施す。8は褐色土層から出土したもので、平底の底部である。9はやや砂質の黄

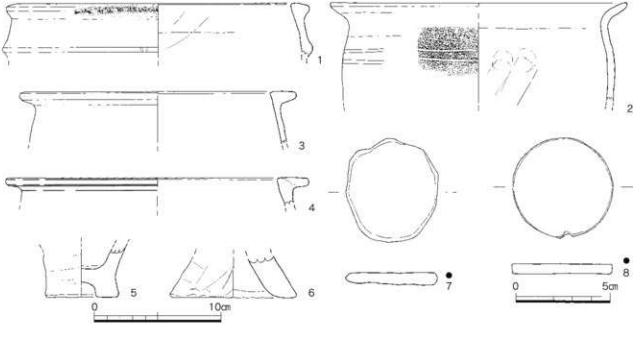


第21図　三雲南小路465番地大溝上包含層出土遺物実測図（1/3・●は3/4）

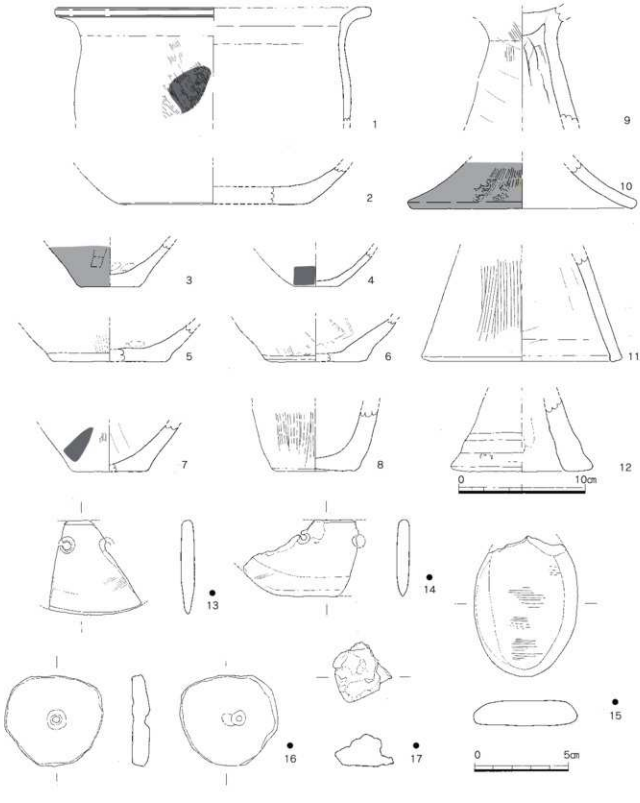
褐色土層から出土した大型の甕の底部である。外面に縦ハケ、内面にナデを施し、肉厚の器壁をもつ。10は検出面で出土した底部片である。外面にススが付着するが、底部からの立ち上がりの開きが大きいため壺の底部の可能性もある。11も検出面出土の甕の下半部である。平底で外面に縦ハケ、内面にナデを施す。

12はやや砂質の黄褐色土層から出土した砂岩質の石庖丁片である。薄手の石庖丁で背の断面は方形である。

第20図１～４は大溝トレンチ５出土品である。１は壺の底部で中央部を欠き、やや内湾しながら立ち上がる。２は甕の底部で平底である。内面にはコゲが付着する。外面は縦ハケメを施す。３も甕の底部である、平底で内外面ともにナデを施す。４は高坏の脚端部である。丁寧な整形で端部の断面は方形である。外面に丹塗りを施す。

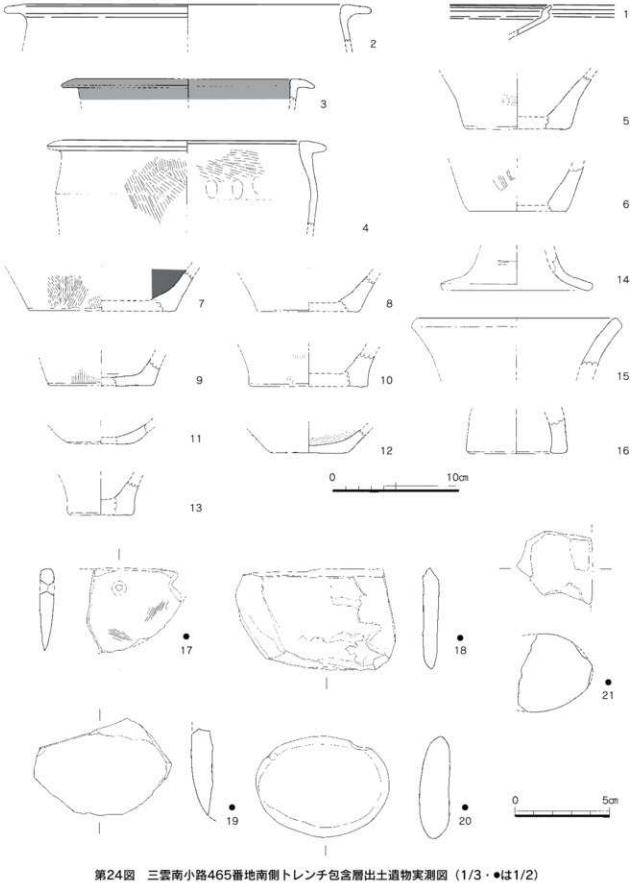


第22図　三雲南小路465番地大溝検出時出土遺物実測図（1/3・●は1/2）



第23図　三雲南小路465番地北側トレンチ出土遺物実測図（1/3・●は1/2）

5～7は大溝トレンチ6出土品である。5は甕の上半部である。口縁部は短くゆるやかに広がり、胴部に張りはない。6は甕の底部である。平底であるが中央部を欠く。外面に斜ハケメ、内面にナデを施す。7は甕の底部で、不安定な平底である。外面に斜ハケメ、内面にナデを施す。外面の一部にはススをもつ。



第24図　三雲南小路465番地南側トレンチ包含層出土遺物実測図（1/3・●は1/2）

第21図は大溝上の包含層として取り上げた遺物である。１は甕の口縁部である。口縁部はやや内傾しており肉厚である。口縁部の下には低い三角突帯を巡らせる。２は甕の底部である。平底で内湾しつつ立ち上がる。外面にハケメ、内面に指押さえとナデを施す。３も底部であるが、その立ち上がり方から壺の可能性もある。外面にハケメを施す。４は器台の底部片である。脚端部は肉厚で、屈曲後、やや厚さを減じる。５は台形状のえぐりをもつ凹基式の打製石鏃で、右側の先端部と側面部を一部欠く。長さ2.0cm、幅1.6cm、厚さ３mm。黒曜石製である。

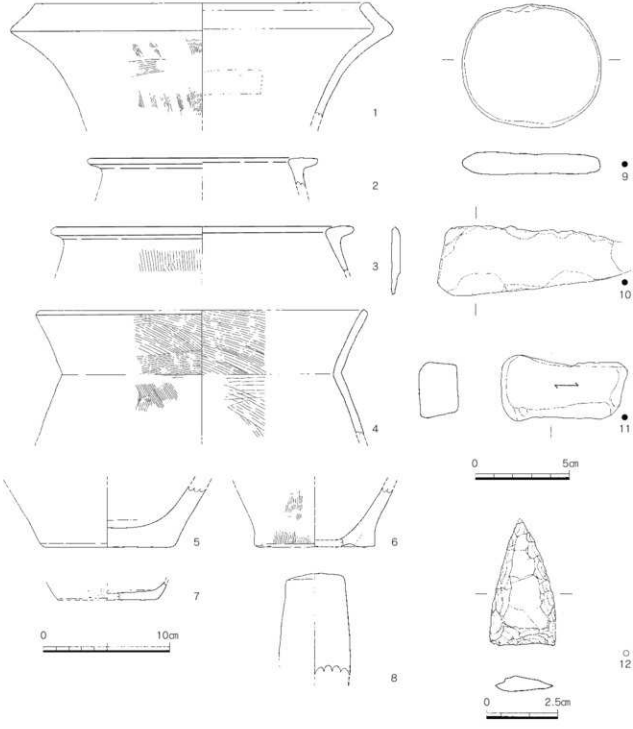
第22図は大溝検出時に出土した遺物である。１は甕の口縁部である。口縁部の断面は三角形で、口縁部下の最大径部分に低い突帯を巡らせる。両者ともに端部に刻目を施す。内外面ともにナデを施す。２も甕の上半部である。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は斜め上方に広がる。口縁端部は丸みをもつ。頸部の下には２本の沈線を巡らせる。内外面ともにナデを施す。３は甕の上半部で、口縁端部は断面三角形である。４も甕の口縁部でその断面は方形である。内外面ともに横ナデを施す。５は甕の底部である。上げ底で、底径は小さく、直立気味に立ち上がる。内外面ともにナデを施す。６は器台の脚裾部である。肉厚で、器表面に強いナデの痕跡を残す。

７は石製の円盤で、左上半を欠く。平坦面は未調整であるが、側面は横ケンマを施す。現存長5.5cm、幅4.8cm、重さ32.78ｇを測る。現段階で厚さが0.6cmと薄手であることから、紡錘車の未成品とは言い切れない。８は紡錘車の未成品である。表・裏面ともに丁寧な研磨が施され、光沢をもつ。側面は横ケンマを施す。厚さが5.2 ～ 5.3mmと均一であることから、穿孔前の終了品といえる。

⑹包含層出土遺物（第23 ～ 26図）

包含層は調査開始時に設定した東西方向に長軸をもつ南北２本のトレンチ（北側･南側トレンチ）調査時のものと、南側トレンチの北側拡張区のもの（北側調査区）と最終的な清掃等で南側トレンチから再度出土したもの（南側調査区）に分けている。南側トレンチ包含層と南側調査区包含層は同一地点であるが、出土時期が異なっているため、別に挿図を作成し、報告した。

第23図は北側トレンチ包含層出土品である。１は甕の上半部である。口縁部は肥厚し、その端部は隅丸方形である。外面は斜ハケメ、内面はナデを施す。２～８は底部片である。２は大型の壺の底部で、中央部を欠く。３も壺の底部で外面に丹塗りを施す。外面には板状の工具痕、内面に指押さえ痕を残す。４は平底である。外面に一部ススをもつ。５は中央部を欠く底部片で、平底である。外面に縦ハケメ、内面にナデを施す。６も底部片であるが、中央部を欠く。平底で、外面に斜ハケメ、内面にナデを施す。７は平底で、その立ちあがり部はやや肉厚である。外面に縦ハケメとナデ、内面にナデを施す。外面底部付近にススをもつ。８は筒状に立ちあがる土器の下半部である。全体的に肉厚で、外面に縦ハケメ、内面にナデを施す。９は高坏の脚柱部で、裾部にむかってやや広がる。坏部接続部にハケメが見られる以外、内外面ともにナデを施す。内面には絞り痕も残る。10は丹塗りの高坏の脚裾部で端部は丸く収める。外面は縦・横ハケメ、内面にナデを施す。11は器台の下半部である。端部の断面は方形に近く、くびれ部に向かい直線的に立ち上がる。外面は縦ハケメ、内面にナデを施す。12は小型の器台の脚部で、肉厚である。内外面ともに強い横ナデを施し、器表面の凹凸が著しい。



第25図　三雲南小路465番地北側調査区包含層出土遺物実測図（1/3・○は3/4・●は1/2）

13は珪質凝灰岩製の石庖丁片で、両端部を失う。平面半月形を呈し、両面穿孔を施す。14は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。平面舟形を呈し、両面穿孔を施す。15は白雲母片岩の川床円礫の表裏面に粗いケズリを施したものである。おそらく紡錘車を作るために厚さを調整する段階のものと思われる。側面は自然面である。現存長さ7.7㎝、幅5.5㎝。重さ101.36ｇを測る。16は土製紡錘車の未成品である。側面は研磨を施して平面形を円形に近づけようとしている。裏表両面から穿孔を施

しはじめた段階で廃棄されている。長さ4.9cm、幅5.3cm、重さ23.36ｇである。17は鉄滓で、重さ22.68ｇを測る。

第24図は南側トレンチ包含層出土遺物である。１は黒川式の精製浅鉢の口縁部である。底部から口縁部に向かい直線的に広がり、口縁部を立ち上げる。その端部をつまみ、外傾させる。口縁端部の内外面には沈線がめぐる。内外面ともに丁寧な横ミガキを施す。

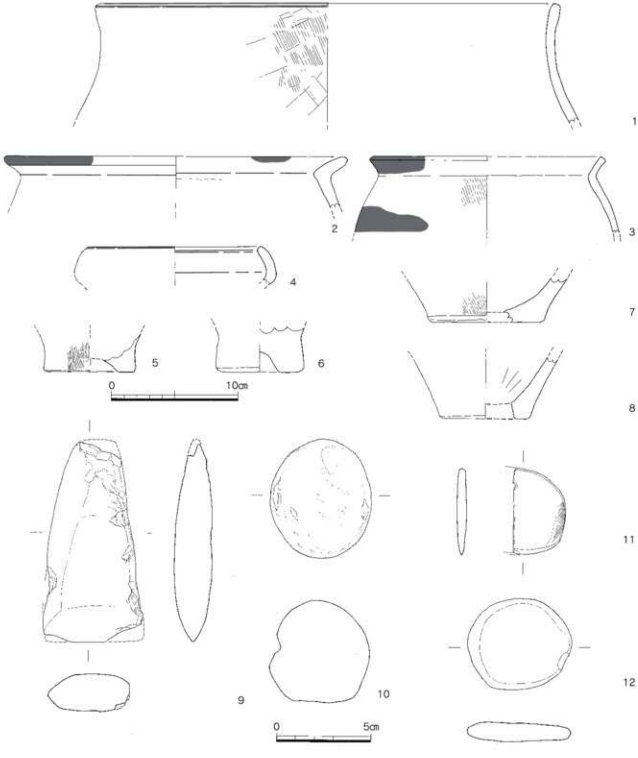
２～13は甕である。２は断面逆Ｌ字形に屈曲する口縁部である。内外面ともにナデを施す。３は口縁部の小片で、端部はやや垂れる。４は甕の上半部で、やや肉厚な口縁部をもち、胴部上位が屈曲し、内外面ともに弱い稜線が入る。外面は縦～斜ハケメ、内面は横ハケメを施す。５～13は底部である。５は中央部を欠く甕の底部で平底である。６も平底で、器壁が厚い。比較的直線的に立ち上がる。７は復元径にやや不安があるが、底径が大きなもので、外面に縦ハケメ、内面にナデを施す。８～10はいずれも中央部を欠く底部片であるが、平底に復元される。11・12は平底であるが、立ち上がり部の外傾度合いが強いので、壺の可能性もある。13は直立気味に立ち上がる径の小さな甕の底部である。やや古相をしめす。

14は高坏の脚部である。屈曲部が緩くラッパ状に広がり、端部を丸く収める。15は器台の口縁部である。器壁が厚く、端部の断面は方形である。16は器台の脚部である。径が小さく、内外面ともにナデを施す。

17は石庖丁の破片である。背の断面は丸みを帯びた方形で、両面穿孔である。幅4.9cm、厚さ0.8cm。18は石庖丁の素材として持ち込まれた石材の破片である。全長8.1cm＋α、幅5.3cm、厚さ0.9cmを測る。全体的に風化が進む。輝緑凝灰岩製である。19は輝緑凝灰岩の剥片である。湾曲部分に自然面を残す。三雲・井原遺跡に持ち込まれた搬入用原石から素材を取り出すために打ち欠いたものか。全長5.0cm、幅7.3cm、厚さ1.1cm。20は白雲母片岩の河川礫である。未加工であるが、紡錘車の素材と考えられる。全長7.1cm、幅5.4cm、厚さ1.6cmを測る。21は両刃石斧の破片である。風化が進み、表面が剥離している個所もある。

第25図は北側調査区包含層出土品である。１は複合口縁壺の口頸部である。やや締まる頸部からラッパ状に広がり、反転後の口縁端部を若干つまみ上げる。外面は縦・横ハケメ、内面はナデを施す。２～４は甕の口縁部である。２は内外面ともに横ナデを施す口縁部である。甕として報告するが径も小さく無頸壺の可能性もある。３はやや内傾する口縁部である。口縁端部は丸く収め、外面に縦ハケを施す。４は断面く字形の甕の口頸部である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は断面方形である。頸部は内外面ともに稜がはいる。口縁部は内外面ともに斜ハケメ、胴部外面は縦ハケメ、内面は横～斜ハケメを施す。器壁は胴部よりも口縁部の方が少し厚い。５・６は甕の底部である。５は平底で直線的に立ち上がり、内外面ともにナデを施す。立ち上がり部の傾きから壺の可能性もある。６も平底の底部で中央部を欠く。内湾しつつ立ち上がり、外面に縦ハケメ、内面にナデを施す。底部と立ち上がり部の接合痕跡が明瞭で、接合部を押さえた後にナデでいる。７も底部である。８は器台の上半部である。中実で筒状を呈する。平原遺跡や篠原東遺跡で類例が見られる。

９は紡錘車の原材と思われる川床円礫である。採集された段階の資料で特に調整等は認められない。直径7.３～6.5cm、厚さ0.95～1.2cm、重さ94.49ｇ。石材は白雲母片岩である。10は剥離が著



第26図　三雲南小路465番地南側調査区包含層出土遺物実測図（1/2・1/3）

しいが石鏃か。先端部を欠く。現存長9.25cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm、重さ25.25g。石材はサヌカイトか。11は小型の砥石で目は細かい。実測図掲載の面とその裏面を砥石面として用いる。長さ6.5cm、幅2.9cm、厚さ2.0cm。重さ78.62g。12は平基式の打製石鏃である。厚さ1cm程度の剥片に左右から調整剥離を行い、レンズ状の断面に整える。切先部分を少し欠く。現存長4.3cm、幅2.4cm、

厚さ0.6cm、重さ5.74g。石材はサヌカイトである。

第26図は南側調査区包含層出土品である。1は珍しい形態の大型の甕である。素口縁の甕で内湾しつつ立ち上がる。口縁端部の断面は方形である。2は甕の口縁部で断面く字形を呈し、端部にススをもつ。端部は丸く収め、頸部内外面に稜がはいる。3は甕の上半部で、口縁部は短い。屈曲部の断面はく字形で、頸部内外面に弱い稜がはいる。頸部から胴部へはやや丸みをもつ。外面に斜ハケメ、内面にナデを施す。口縁部と胴部にススをもつ。4は袋状口縁壺の口縁部片である。端部は丸く収め、屈曲部もやや下に垂れる印象を与える。5は甕の底部で上げ底である。中央部を欠くが1cm程度の上げ底か。外面に縦ハケメを施す。6も上げ底の底部である。内外面ともにナデを施す。5よりも古式を呈す。7は中央部を欠く底部。その立ち上がり部の傾きから壺の可能性もある。外面に斜ハケメを施す。8も中央部を欠く甕の底部である。内外面ともにナデを施す。

9は両刃石斧で基部と刃部、左側側面の一部を欠く。右側側面には自然面を残し、横断面形は突レンズ状を呈さない。現存長10.7cm、現存幅5.3cm、厚さ1.9cm、重さ157.88g。石材は蛇紋岩系である。10は球状敲打具である。断面は全体的に円形であるが、下辺は敲打痕を残し、直線的となっている。縦6.3cm、横5.4cm、厚さ5.4cm、重さ299.37gである。11は輝緑凝灰岩製の石庖丁片である。全体的に丸みを帯び、側縁端部には研磨痕を残す。穿孔部に敲打痕はなく、鉄錐による穿孔と思われる。なお、穿孔部と背部の幅は狭い。長さ4.5cm、現存幅2.8cm、厚さ0.5cm、重さ9.21g。12は紡錘車の原材となる未加工石材である。川床円礫と思われる。直径4.8cm、幅5.5cm、重さ43.21g。

(平尾)

Ⅱ．八龍地区224番地

１．調査概要

本調査は三雲・井原遺跡の外郭を巡る大溝の所在確認を目的とする重要遺跡確認調査である。昭和49年度の福岡県教育委員会による寺口地区Ⅱ－17の調査では、大溝が２条検出された。それを受け大溝の延長を探すことを目的に、八龍地区221番地の調査が行われ、北側の大溝が検出している。本調査地点は、両遺跡の間に位置し、古墳時代前期後半に埋没する大溝２条を検出した。このほかに、古墳時代前期後半の住居群及び弥生時代中期初頭の甕棺墓、木棺墓を検出している。

２．遺構と遺物

⑴大溝

①１号大溝

１号大溝は第１調査区の南西側から北東側に延びる形で検出され、調査区内で61.0mが確認された。埋没状況と時期の把握のため、トレンチを３ヶ所設定し、南西側からＡ、Ｃ、Ｄトレンチとした。調査の結果、ＣとＤの平均で溝幅は3.8m、深さ1.1mを測り、断面逆台形を呈している。また、溝の底の標高は、Ｃトレンチで37.400m、Ｄトレンチで37.330mである。

Ａトレンチ

１号大溝の南側に入れたトレンチで、溝は２段階の掘削で断面が逆台形となる。調査途中で土層が崩れたため、土層実測を断念した。

Ｃトレンチ（第28図）

１号大溝のほぼ中央に入れたトレンチで、溝は２段階の掘削で断面が逆台形となる。溝幅3.9m、深さ1.2mを測り、土層観察では、大きく３回に分かれて埋没していることが確認できた。17～20層は下層。砂質系の埋土で、黄褐色の地山ブロックが多く入る。５～15層は中層で、基本的には茶褐色の粘質土層である。１～４層は上層で、黒色粘質土層が基本となる。上層に土器が多く、下層に行くほど土器量は少なくなる。

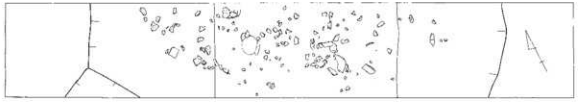
Ｄトレンチ（第29図）

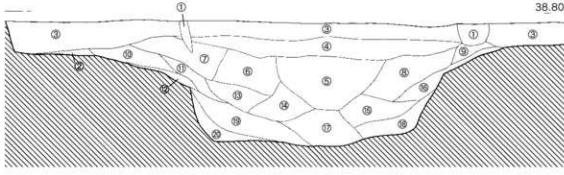
１号大溝の北側に入れたトレンチで、溝の断面は緩やかな逆台形となる。溝幅3.6m、深さ1.1mを測る。溝の肩の部分では、割れた布留式甕の口縁中央から小型丸底壺が出土しており、そこからやや南で鋳造鉄斧が出土している。祭祀の痕跡であろうか。土層はＣトレンチと同様、大きく３回の埋没が認められる。14～23層を下層、５～13層を中層、１～４層を上層として土器の取り上げを行った。下層に行くほど土器量が少なくなる状況はＣトレンチと同様である。

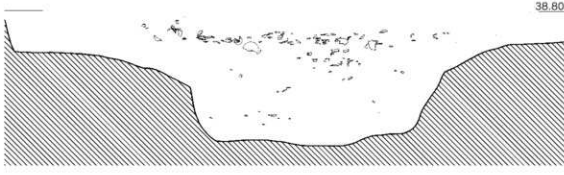
出土遺物（第30～38図）

１は二重口縁壺の口縁部片で、口縁はやや外反し、口縁下は突帯状となる。頸部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目である。２も二重口縁壺の口縁部片で口縁がやや外反する。３は短い二重口縁がつく壺で、肩が張り丸底である。肩～胴上部にかけて、縦方向の刷毛目の後横方向の刷毛目を施す。胴下位は細かな縦方向の刷毛目である。内面はヘラ削りで、胴上位は横方向、胴下

位は斜方向である。4は口縁を欠損する二重口縁壺で、外面頸部と肩部に沈線が2条めぐり、綾杉文を施す。内面はヘラ削りが明瞭である。5は複合口縁壺の口縁部片で、頸部の外反が強い。口縁下の突帯に刻み目を施す。頸部は外面が縦方向の刷毛目、内面が横方向の刷毛目である。6は素口縁の壺で、口縁部に粘土の接合痕が明瞭である。頸部と肩部の境には突帯が巡り、内外面共に刷毛目調整である。7は素口縁壺であるが、口縁径が小さい。外面器壁の磨滅が著しく、調整不明瞭である。8は小型の壺で、口縁が大きく外反する。底部は丸底で、外面が斜方向の刷毛目。内面はヘラ削りである。9は大形壺の口縁部片で、鋤先の名残は失われている。口縁端部には刻み目を施す。10は小型壺で、底部は丸底。外面は刷毛目、内面は指ナデの痕跡が明瞭に残る。11も小型壺で薄手の作りである。外面は粗い刷毛目が残る。12は壺の底部片で、上げ底気味である。13は長胴甕で、胴中位が膨らむ。外面は肩部が横方向の刷毛目、内面はヘラ削り。14は長胴甕の胴上部片で、外面は平行タタキ、内面は刷毛目である。15は、くの字口縁を持つ長胴甕で、内外面共に刷毛目調整。肩があまり張らない。16は布留甕で、胴下位を欠損している。肩が張り、沈線を1条巡らす。内面は横方向のヘラ削りである。17も布留甕で、外面は磨滅が著しく、横方向の刷毛目がわずかに見える程度である。内面はヘラ削りである。18も布留甕で、胴上位のみの残存。胴上位の肩部には縦方向の刷毛目の後に横方向の刷毛目を施す。内面は横方向のヘラ削りである。19は布留甕で、口縁端部を平坦にしている。外面は縦方向の刷毛目の後に横方向の刷毛目を施す。内面は下から上へのヘラ削りである。20は全体的に磨滅が著しく、調整が不明瞭である。わずかに外面に刷毛目、内面にヘラ削りが残る。21は肩が張らない甕で、胴上位に1条の沈線を巡らす。外面に横方向の刷毛目がわずかに残る。22は口縁部片のみ残存する甕で、内面に板ナデ痕跡が残る。23も胴上部のみを残す甕で、内面のヘラ削りのみ確認できる。24の甕は全体的に風化が著しく調整不明瞭。25は甕で口縁が若干内湾する。内面のヘラ削りがわずかに残る。26の甕は、くの字口縁を持ち、胴中位で最大径となる。口縁部外面にはタタキ痕が残り、内外面に粗い刷毛目を施す。27は甕の胴上部片で、外面の刷毛目はわずかに確認できる程度である。28は甕の口縁部片。粗い刷毛目が外面に残る。29は口縁端部をわずかに凹ませる甕で、口縁のみの残存である。30～37は甕の口縁部片で、調整が分かるものは少ない。38は口縁が外反する甕で、混入したものであろう。39は平丸底の底部をもつ甕で、くの字口縁をもつ。内面胴下位は強いナデ調整である。40は尖り底の小形甕で、口縁及び胴上位にタタキ痕、胴下位は棒状工具によるナデである。内面は斜方向の刷毛目での後、指ナデを施す。41は甕の底部片で、若干上げ底気味である。42も甕の底部片。平底で、外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整である。43は甕の底部片。外面に縦方向の刷毛目が明瞭に残る。44は平底の底部片で、風化が著しく調整不明瞭である。45は壺の底部片で、底部付近は指ナデ調整である。46は高杯で、脚部を欠損している。杯部の形状から柳田編年のⅢa期で、4世紀後半である。47は高杯の脚部片で、短脚化している。外面調整は縦方向のミガキで、胎土は精良である。48も高杯の脚部片で、外面はナデ調整、内面は絞り痕が確認できる。49は高杯で、口縁部と脚裾部を失っている。外面は縦方向のミガキである。50は49と同じく高杯で、口縁部と脚裾部を失っている。内外面ともに刷毛目調整である。51は小型丸底壺で、口縁部が外方に開く。内外面共に細かな刷毛目調整を施す。52も小型丸底壺で、口縁よりも体部が小さくなっている。外面は細かな刷毛目、内面はヘラ削りである。

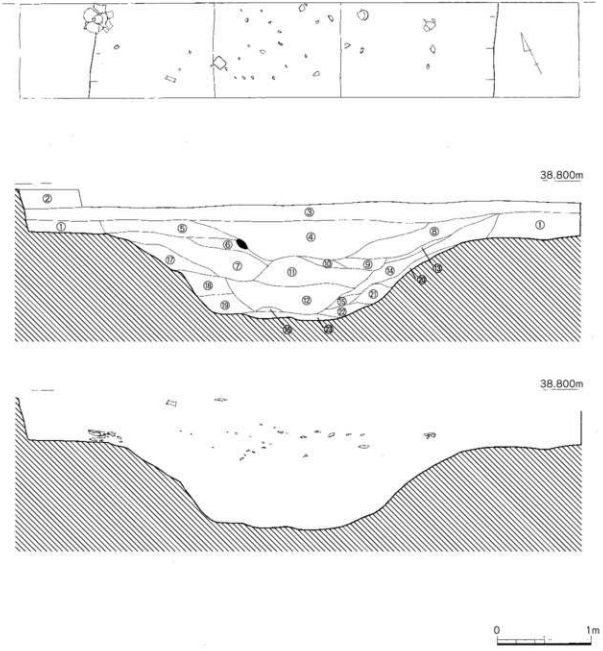






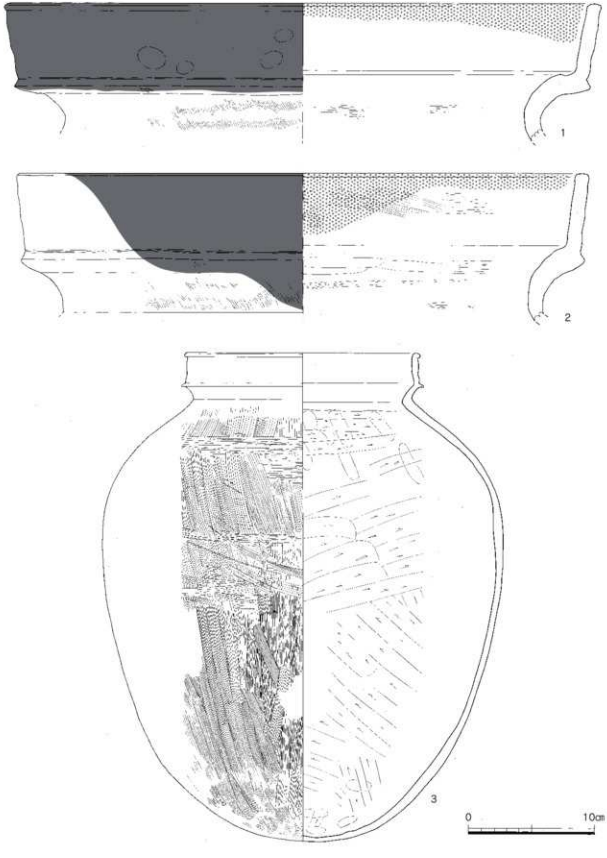
①黒色粘質土層
②黄茶褐色砂質土層
③明茶色粘質土層（D－21）
④黒茶褐色粘質土層（土器を多量に含む）
⑤暗茶褐色粘質土層（土器を含む）D－20
⑥茶褐色粘質土層
⑦茶褐色砂質土層（D－18）
⑧黒茶色粘質土層（D－16）
⑨茶褐色砂質土層
⑩暗黄茶褐色砂質土層(黄褐色の地山ブロックを含む)
⑪茶褐色粘土質
⑫暗褐色粘質土層
⑬茶褐色粘質土層
⑭明茶褐色粘質土層
⑮茶褐色砂質土層（D－9）
⑯明褐色砂質土層（D－4）
⑰暗黄褐色砂質土層（礫を多く含む）
⑱明茶黄色砂質土層（D－2）
⑲暗褐色砂質土層（D－5，6）
⑳明褐色砂層

第28図　三雲八龍224番地1号溝Cトレンチ平・断面実測図（1/40）

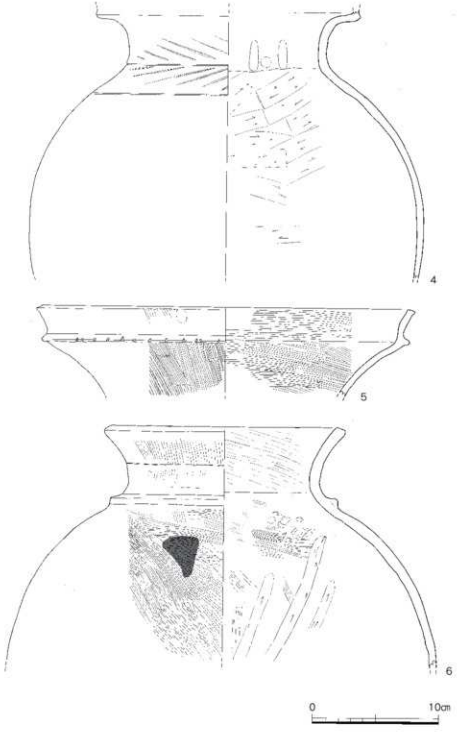


①暗茶褐色粘質土層（弥生遺構面）
②暗灰色粘質土層（旧水田面）
③明茶色粘質土層（色含層）
④暗茶褐色粘質土層（布留併行の土器を多く含む）
⑤黒褐色粘質土層
⑥茶褐色粘質土層
⑦茶褐色砂質土層
⑧黒茶褐色粘質土層
⑨茶褐色粘質土層
⑩明茶褐色粘質土層
⑪暗茶褐色粘質土層
⑫茶褐色礫層
⑬薄褐色粘質土層
⑭暗褐色砂質土層
⑮茶褐色砂質土層
⑯明茶褐色砂礫層
⑰褐色砂質土層
⑱暗褐色砂質土層
⑲茶褐色砂礫層
⑳明褐色砂質土層（黄褐色の地山ブロックを多く含む）
㉑茶褐色砂質土層
㉒明茶褐色砂質土層
㉓明褐色砂礫層

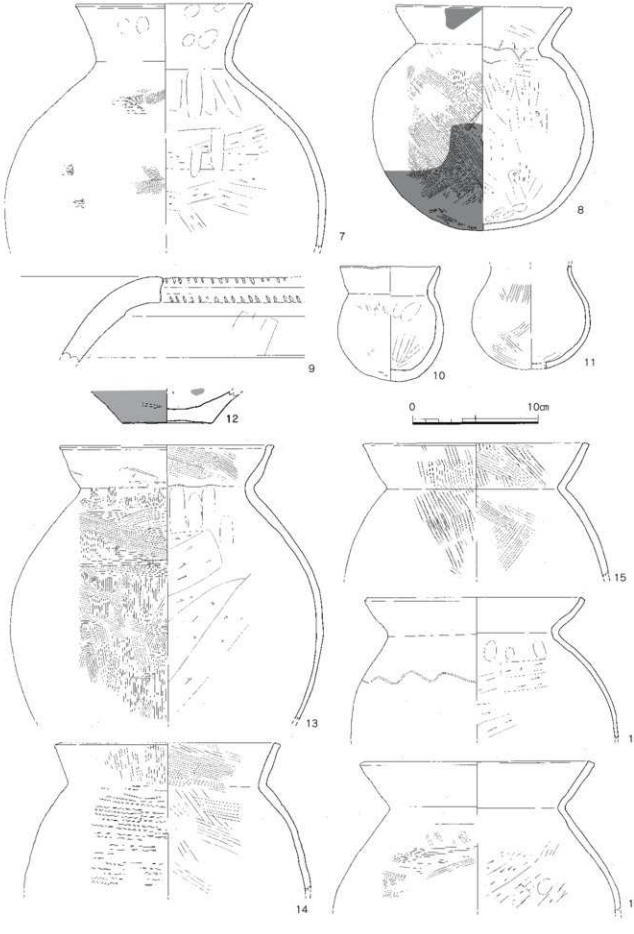
第29図　三雲八龍224番地1号溝Dトレンチ平・断面実測図（1/40）



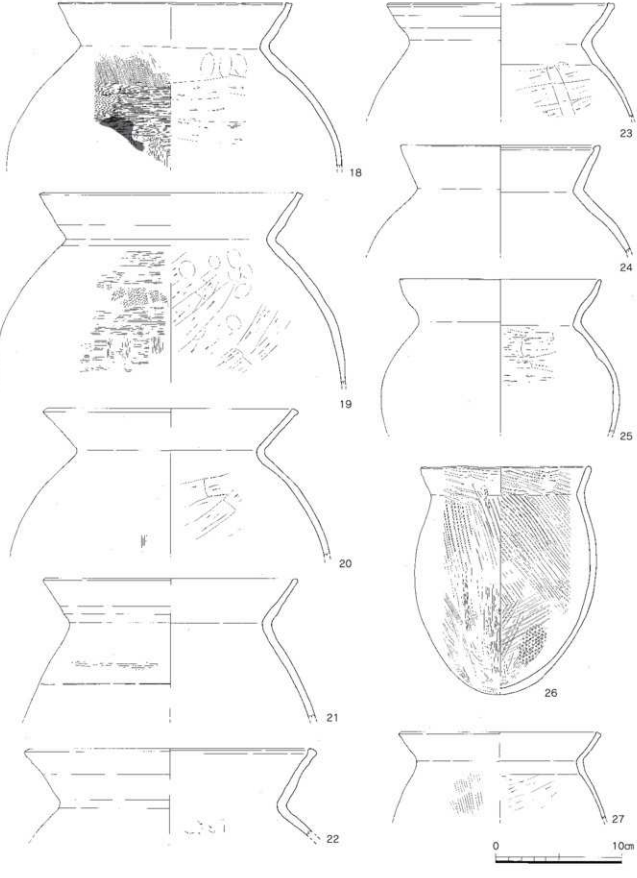
第30図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図①（1/3）



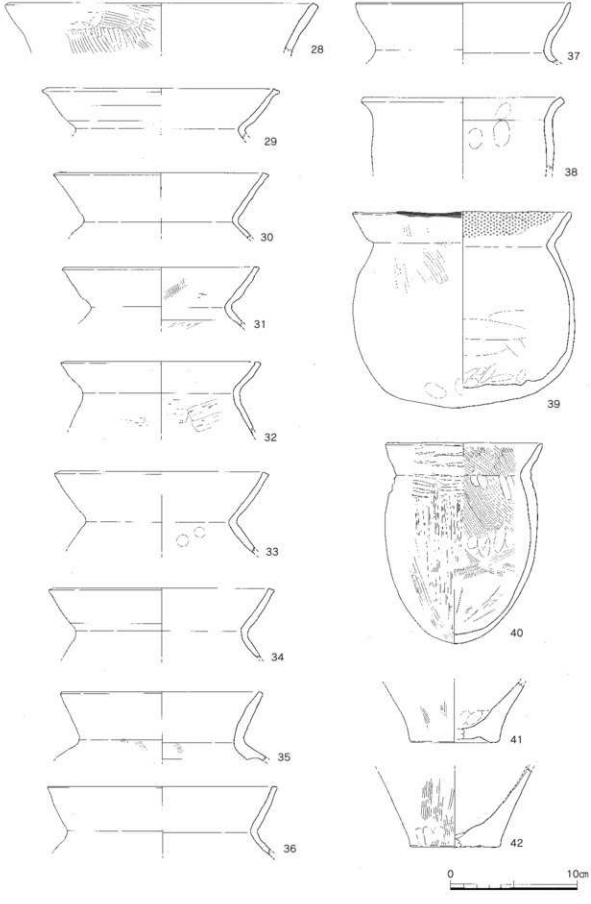
第31図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図②（1/3）



第32図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図③（1/3）



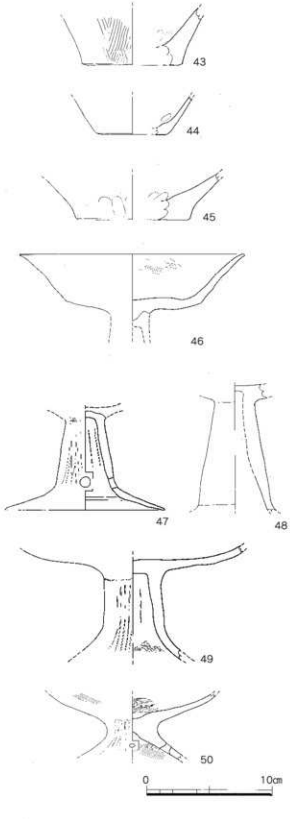
第33図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図④（1/3）



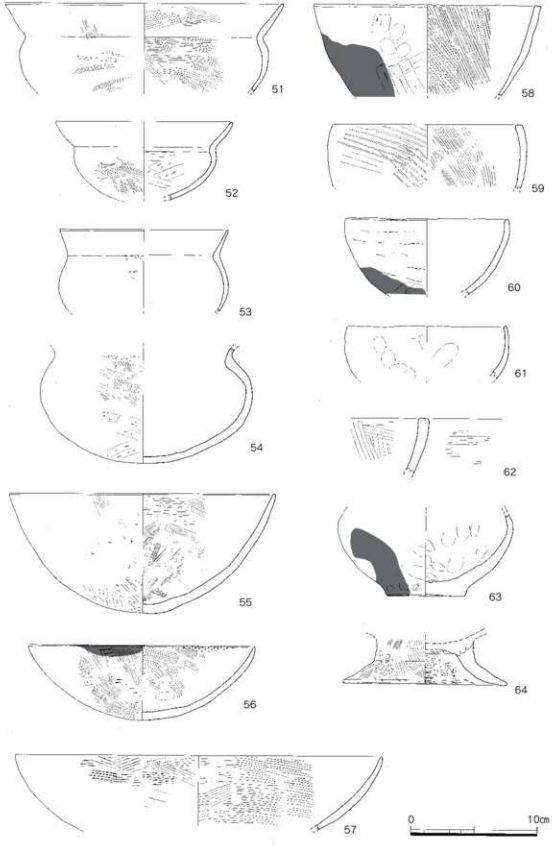
第34図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図⑤（1/3）

53は小型丸底壺で、口縁が直立気味に立ち上がる。54は口縁部を欠損した小型丸底壺で、体部下半にヘラ削りを施す。55は鉢形土器で、底部は丸底である。外面はヘラ削りのまま残り、内面は刷毛目調整である。弥生時代終末期のものであろう。56は55より浅い鉢形土器で、外面はタタキを刷毛目で消している。内面は横方向の刷毛目調整を施す。57は鉢形土器で、口縁外面のタタキが残り、体部下半は板ナデで消している。内面は横方向の刷毛目である。58は底部を欠損する鉢形土器で、外面下半がヘラ削り、内面が粗い刷毛目である。59は直立口縁の鉢で、外面が粗い刷毛目、内面が細かな刷毛目を施す。60も直立口縁の鉢で、外面に接続痕が多く残る。61は鉢形土器で、内外面ナデ調整。口縁は内湾する。62も鉢形土器の口縁部片で、内外面ともに刷毛目調整である。63は小型の鉢で、口縁部を欠損する。内外面共にナデ調整である。64は脚台付鉢の脚台部分である。脚台部の調整は、内外面共に刷毛目である。65は鼓型器台で上部を欠損する。脚裾部は縦方向のミガキがあり、内面はヘラ削りである。柳田編年のⅡa期である。66は鼓型器台で、内外面共に刷毛目調整である。67は器台の裾部で、タタキの後に刷毛目を施す。68は、鋳造鉄斧片で刀部のみ残存する。

第35図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図⑨（1/3）



第36図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図⑥（1/3）



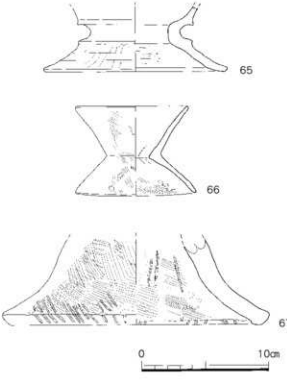
第37図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図⑦（1/3）

②２号大溝

２号大溝は、１号大溝と並行して延びる大溝で、第２調査区内では29.0mを測り、１号溝とは18.0m～23.0m離れている。１号大溝と同じく、埋没過程や時期を把握するために、確認トレンチを２ヶ所に配置し、Ｅトレンチ、Ｆトレンチとした。

Ｅトレンチ（第40図）

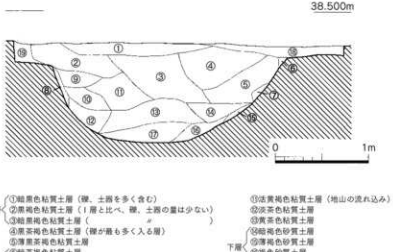
２号大溝のほぼ南側に入れたトレンチで、溝は断面が逆台形となる。溝幅3.9m、深さ0.6mを測り、床面では標高37.690mである。土層観察の結果、大きく３回に分かれて埋没している。14～17層は下層で、褐色系の砂質土が主体となる。土器の出土は少ない。４～13層は茶褐色粘質土が基本で、礫の出土が多い。上層は１～３層で、黒褐色粘質土が基本で、土器の出土が最も多い。



第38図　三雲八龍224番地1号溝出土遺物実測図⑧(1/3)

Ｆトレンチ（第39図）

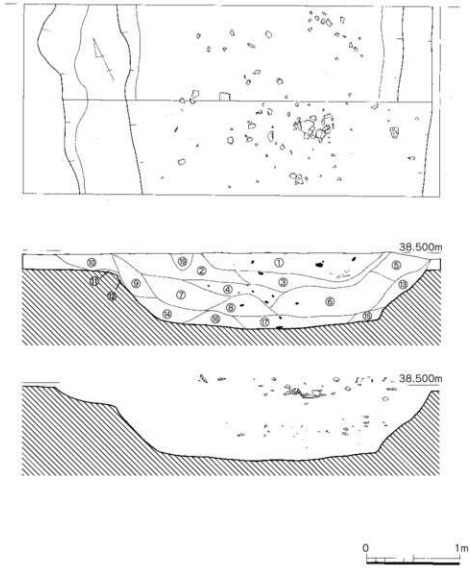
２号大溝の北側に設定したトレンチで、断面は丸みのある逆台形となる。床面は37.120mと北に向かって下がっている。土層観察では、下層（８、12～17層）に土器が少なく、中層（２～11層）から上層（１層）に向かって土器が多くなる傾向はＥトレンチと同様である。



第39図　三雲八龍224番地2号溝Ｆトレンチ土層断面実測図（1/40）

出土遺物（第41図）

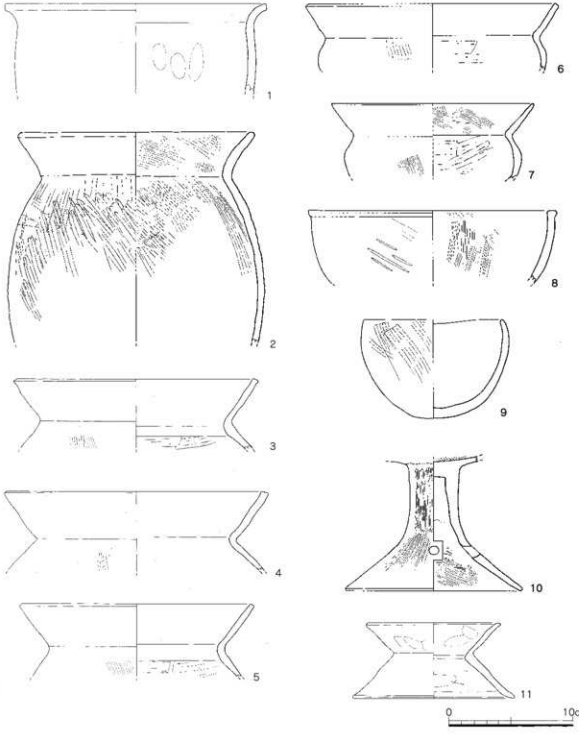
１は甕で、口縁が外反する。風化のため外面調整は不明瞭である。２は在地系の甕で、外面は棒状工具によるナデ調整の後、縦方向の刷毛目である。内面は斜方向の刷毛目を施す。３～５は布留甕の口縁部片で、外面に刷毛目、内面にヘラ削りを行う。６は小型丸底壺で、口縁が体部より開き、外面が刷毛目、内面が横方向のヘラ削りである。７は底部を欠損する小型丸底壺で、外面は刷毛目、内面は横方向の



上層
①暗黒色粘質土層（礫、土器を多く含む）
②黒褐色粘質土層（1層に比べ、礫、土器の量は少ない）
③暗黒褐色粘質土層（　〃　）
中層
④黄茶褐色粘質土層（礫が最も多く入る層）
⑤薄黄茶褐色粘質土層
⑥暗茶褐色粘質土層
⑦明茶褐色粘質土層
⑧茶褐色粘質土層
⑨汚茶褐色粘質土層
⑩黒褐色粘質土層
中層
⑪汚黄褐色粘質土層（地山の流れ込み）
⑫淡茶色粘質土層
⑬黄茶色粘質土層
下層
⑭暗褐色砂質土層
⑮薄褐色砂質土層
⑯褐色砂質土層
⑰明褐色砂質土層
⑱暗黒色粘質土層（ピット）

第40図　三雲八龍224番地2号溝Eトレンチ平・断面実測図（1/40）

ヘラ削りで仕上げる。８は鉢形土器で、口縁端部を外方につまみ出す。外面はタタキ痕を残し、内面は縦方向の刷毛目を施す。９は小形の鉢形土器で、底部は丸底である。外面は斜方向の刷毛目、内面はナデ調整である。10は高杯の脚部で、短脚化している。脚部は細かなミガキを施し、内面は横方向の刷毛目である。11は鼓型器台で、既に簡略化された形である。調整は内外面共にナデである。



第41図　三雲八龍224番地2号溝出土遺物実測図（1/3）

⑵竪穴式住居

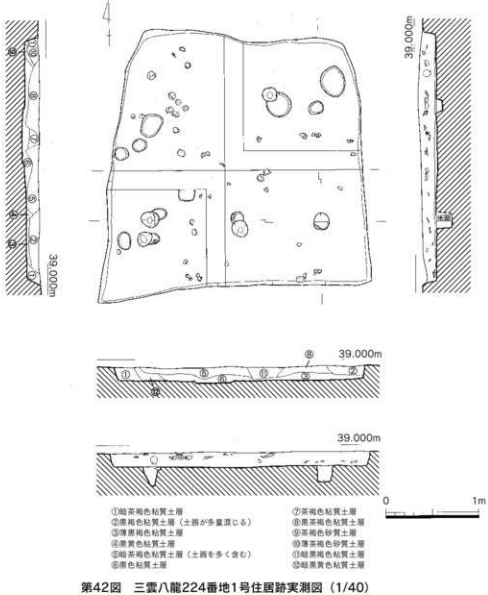
調査区内で竪穴式住居は９軒確認され、７号住居が円形住居で、その他は方形または長方形住居である。住居群の内、１、２号住居のみを調査対象とし、その他は現地保存とした。

１号住居跡（第42図）

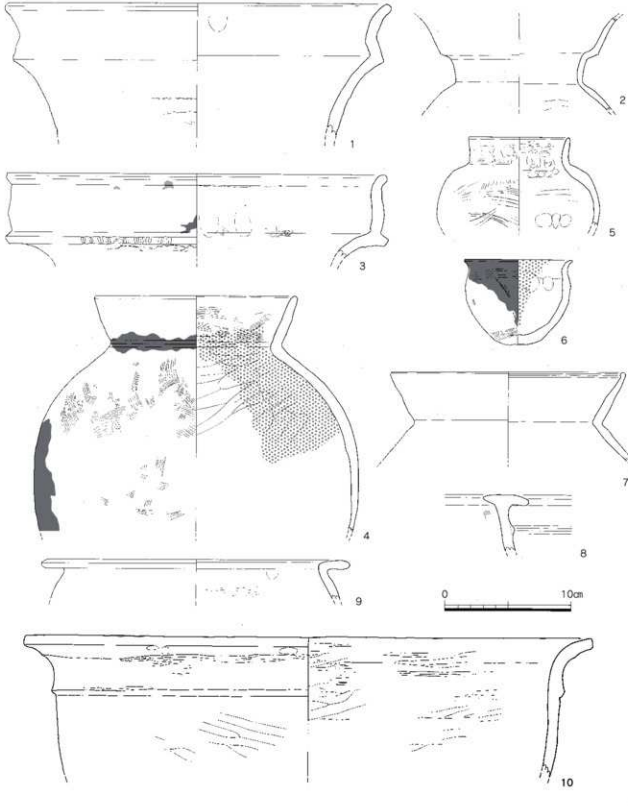
第１調査区の調査区南西側で検出された住居跡で、１号大溝を切っている。規模は東西2.7m、南北2.8mの歪な正方形で、4本柱と思われたが、3本しか確認できず、北西側の柱穴は確認できなかった。

出土遺物（第43・44図）

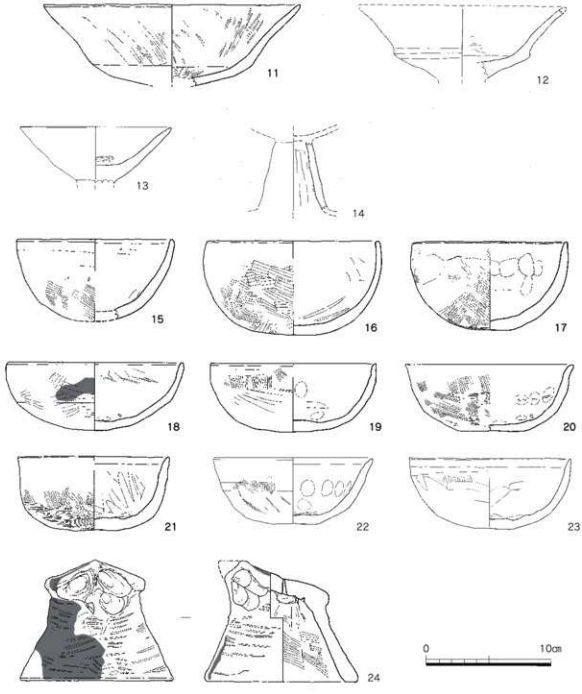
１は複合口縁壺の口縁～頸部が残存するもので、口縁部が外反する。２は山陰系二重口縁壺で、口縁～胴上位が残存する。内外面共にやや磨滅しており、調整不明瞭。３も山陰系二重口縁壺の口縁部片で、口縁部が直立気味に立ち上がる。１段目の口縁端部には刻み目を施す。４は甕で、口縁



第42図　三雲八龍224番地1号住居跡実測図（1/40）



第43図　三雲八龍224番地1号住居跡出土遺物実測図①（1/3）



第44図　三雲八龍224番地1号住居跡出土遺物実測図②（1/3）

の直立化が進んでいる。外面は細かな刷毛目で、内面は斜方向のヘラ削りである。柳田編年のⅢa期であろう。5は小壺で、胴下半を欠損する。口縁は直立気味で、外面は縦方向の刷毛目、内面は強い指ナデ痕が残る。6は小型壺で、口縁が外反する。外面は刷毛目調整の後ナデ調整、内面は指オサエで仕上げている。7は布留甕の口縁～胴上部片で、口縁端部を内方につまみ出す。8は鍋先口縁の甕で、口縁下に三角突帯がある。9は逆L字状口縁を持つ甕で、内面に粗い刷毛目がわずか

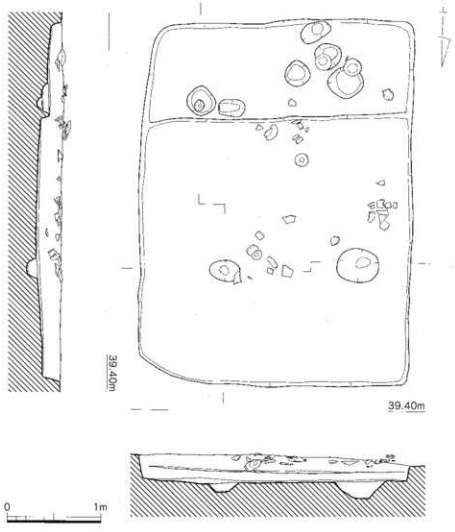
に残る。10は甕棺の口縁部片で、口縁下に段がつく。内外面共にミガキを行うが、内面に刷毛目の痕跡がわずかに残る。11は高杯の杯部片で内外面共に縦方向のミガキである。胎土は精良である。12は高杯の杯部片であるが、風化が著しく調整は不明瞭である。13は口縁が直線的に伸びる小形の高杯である。14は高杯の脚部片で、既に短脚化している。15は椀で丸底の底部を欠損する。外面は体部下半が横方向の刷毛目、内部が板状工具によるナデである。16は口縁が若干内湾する椀で、外面に粗い刷毛目を施す。17は椀。高さがあり、口縁は直立気味に立ち上がる。外面は粗い刷毛目、内面は指オサエで成形する。18も椀で、外面は粗い刷毛目、内面は板状工具でのナデである。19は椀で、口縁が直立する。外面は粗い刷毛目を横ナデで消している。20は椀で、口縁部は外反する。外面は粗い刷毛目、内面は指ナデを施す。21は椀で、外面底部は横方向の刷毛目、体部中位は縦方向の刷毛目を施す。22の椀は口縁が外方気味に仕上げられる。外面は粗い刷毛目、内面は強い指ナデである。23は椀で、外面は刷毛目の後にナデ調整、内面もナデ調整である。24は舎形器台で、外面は粗いタタキ、内面は刷毛目調整である。天井部の中心には一孔開けている。

２号住居跡（第45図）

第１調査区の調査区南東側で検出した竪穴式住居で、規模は東西2.９m、南北3.９mの長方形住居である。出土土器から４世紀後半には埋没する住居ではあるが、南側にはベッド状遺構があり、４本柱の２本がベッド上に位置する。

出土遺物（第46・47図）

１は甕で、くの字の口縁から肩が張り丸底へと窄まる。外面および口縁内面は刷毛目調整、胴部内面はヘラ削りである。２は口縁と頸部の境を強く横ナデする甕で、外面は細かな刷毛目、内面は胴上位が斜方向のヘラ削り、胴下位が縦方向のヘラ削りである。３は胴部のみ残存する甕で、外面は細かな刷毛目、内面はヘラ削りである。４は小壺の口縁部片で、口縁の内外面は刷毛目の後、板状工具によるナデを施す。５は直立気味の口縁を持つ甕で、外面は刷毛目、内面はヘラ削りを施す。６は長頸壺の口縁部片か。口縁部は直線的に外方に延びる。内外面共に刷毛目である。７は複合口縁壺の口縁部片で、内外面刷毛目調整である。８は甕の胴部片で、内面は横ナデ、外面は棒状工具によるナデである。９は小型丸底壺で、口縁～体部上位にかけて残存する。10は小形の壺で、頸部に強い横ナデを施す。体部外面は細かな刷毛目で、内面は指ナデで仕上げる。11は小形の壺で、外面は刷毛目の後、指ナデで成形している。12は甕の底部片で、平底である。外面は縦方向の刷毛目で、内面はナデ調整である。13は高杯で、杯部は膨らみをもちながら立ち上がり、杯部中位に１条の沈線を巡らす。脚部は短脚化している。14は杯部のみの残存で、中位に段差があり、口縁が外方に延びる。内外面共に刷毛目である。15も杯部のみの残存で、下位で屈曲している。内外面共に刷毛目調整。16は高杯の杯部のみの残存で15と同様下位で屈曲する。17は高杯の杯部のみ残存。全体的に丸みを持って立ち上がり、下位に段差がつく。外面は風化が著しく調整不明瞭であるが、内面は横方向の刷毛目である。18は鼓型器台で、口縁部を欠損している。裾部は暗文風のミガキ、内面は横方向のヘラ削りである。19は脚付鉢で、全体的に歪みが著しい。鉢の胴部は横方向の刷毛目、内面下位はヘラ削り、中位は指ナデである。20は手づくね土器で、碗形である。全体をナデで成形している。



第45図　三雲八龍224番地2号住居跡実測図（1/40）

3号住居跡

第１調査区中央部西側で検出された住居で、１号溝に切られる。規模は東西3.8m、南北5.0mで、未調査である。

4号住居跡

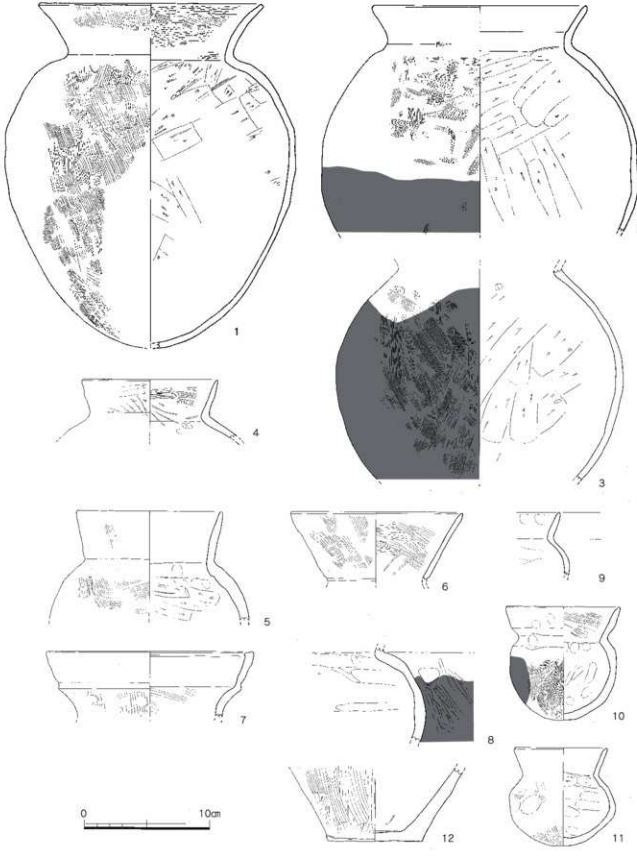
第１調査区中央部で、１号大溝を切る形で検出された住居。規模は東西4.5m、南北5.0mで、未調査である。

5号住居跡

第２調査区の中央部で検出された住居で、２号大溝、７号住居を切る形で検出された。規模は東西4.3m、南北4.0mで、未調査である。

6号住居跡

第２調査区の北側で検出された住居で、２号大溝を切る形で検出された。規模は東西4.3m、南



第46図　三雲八龍224番地2号住居跡出土遺物実測図①（1/3）

北4.0mで、未調査である。

7号住居跡（第48図）

第２調査区のほぼ中央で、５号住居、２号大溝に切られる形で検出された。円形住居で、規模は直径が3.5mで、未調査である。住居内より三角形石包丁が出土している。

出土遺物（第49図）

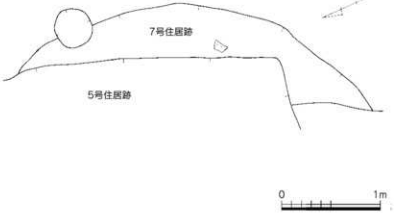
１は大形の石包丁で三角形を呈する。片方に寄った所で２孔空けている。幅8.6cm、最存長15.2cm、厚さ0.7cmを測る。

8号住居跡

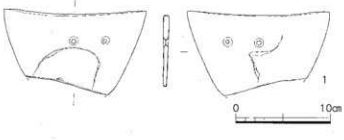
第１調査区の西側中央に位置する住居で、１号大溝、９号住居を切る形で検出された。規模は東西5.3m、南北5.0mで、未調査である。

9号住居跡

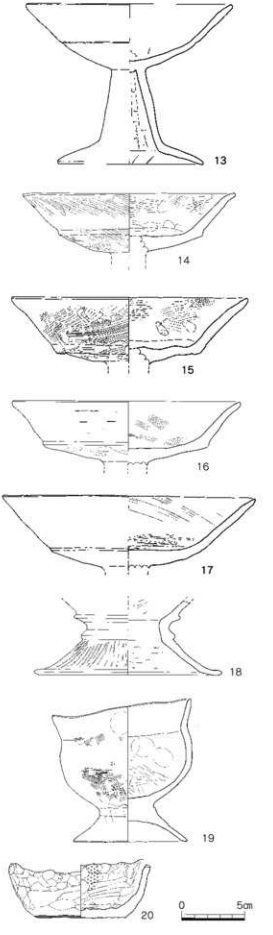
第１調査区は８号住居跡に切られる形で検出された住居で、規模は東西3.5m、南北3.5mで、未調査である。



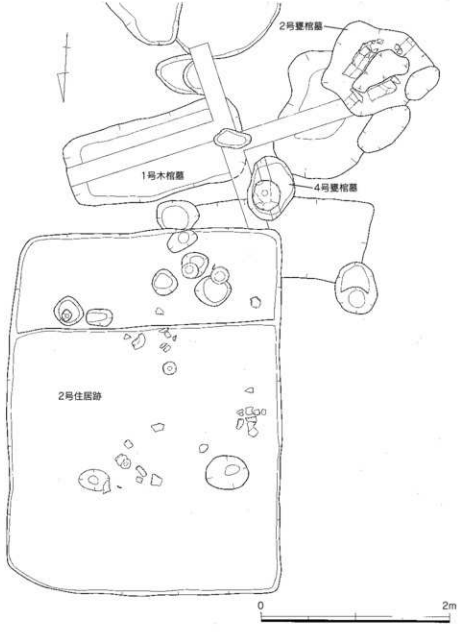
第48図　三雲八龍224番地7号住居跡実測図（1/40）



第49図　三雲八龍224番地7号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第47図　三雲八龍224番地2号住居跡出土遺物実測図②（1/3）



第50図　三雲八龍224番地2号住居跡、1号木棺墓、2・4号甕棺墓平面実測図（1/40）

⑶木棺墓

1号木棺墓（第51図）

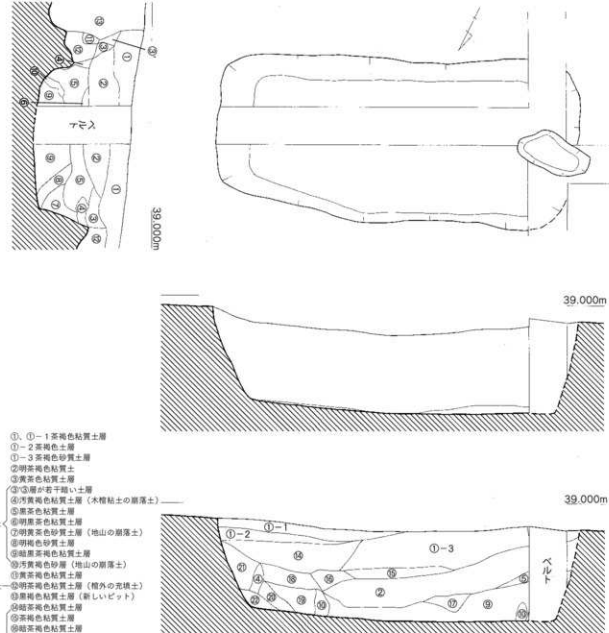
第１調査区内の南側に展開する墳墓群で、周囲に甕棺墓が付属する。木棺墓の平面は隅丸長方形で、南北長1.6m、東西幅3.8m、深さ0.9mを測る。土層観察では２～10層が木棺内部の埋土で、４層に木棺の立ち上がりが確認できた。基本的には北側からの埋土の流れで埋没している。副葬品等の出土はなかった。

⑷甕棺墓

1号甕棺墓（第52図）

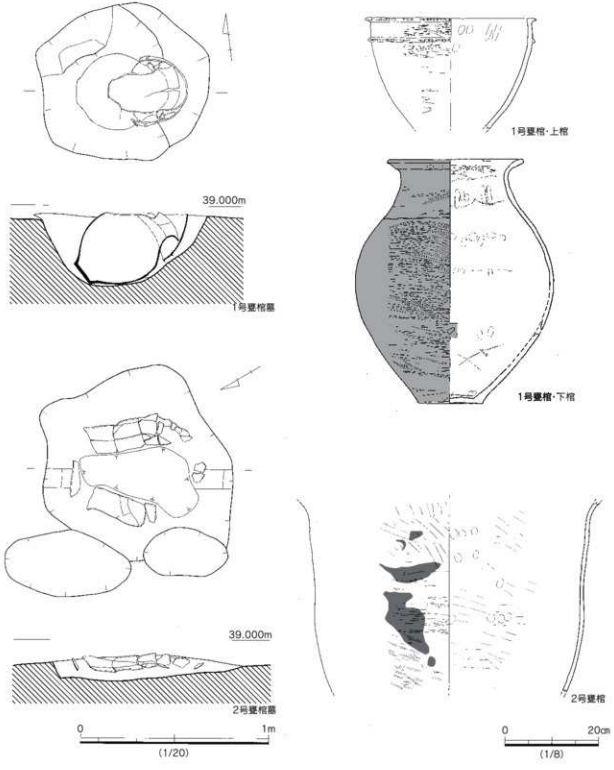
１号木棺墓の西側で検出された甕棺墓で、２号甕棺墓と隣接する。墓壙の上位が掘削を受けており、甕棺が破壊されている。墓壙の平面形は円形を呈する。合口は呑口式で、主軸方位Ｎ－83°－Ｅをとる。弥生時代中期初頭と考えられる。

上棺　弱く張り出した逆Ｌ字形の鉢形土器で、口縁下に三角突帯を１条貼付する。口縁、突帯ともに端部に刻み目を施す。外面はナデの後、横方向のミガキを施し、内面はナデである。

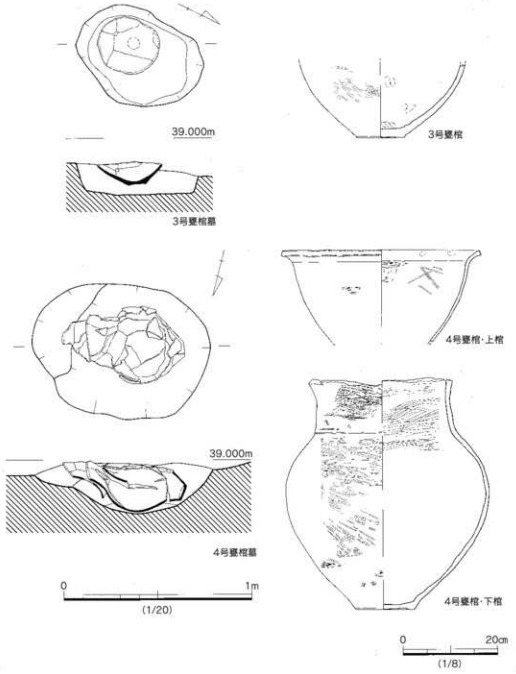


第51図　三雲八龍224番地1号木棺墓実測図（1/40）

下棺　口縁部を粘土帯で膨らみを持たせ、頸部下に１条の沈線を巡らす。肩はあまり張らず、胴中位に最大径がある。外面は丹塗磨研で、口縁内面にも横ミガキを施す。弥生時代中期初頭と考えられる。



第52図　三雲八龍224番地1・2号甕棺墓実測図（1/20、1/8）



第53図　三雲八龍224番地3・4号甕棺墓実測図（1/20・1/8）

2号甕棺墓（第52図）

1号木棺墓の西側で検出された甕棺墓で、棺体のほぼ中央を攪乱が破壊している。墓壙は歪な台形状を呈しており、主軸方位N－31°－Wをとる。金海式甕棺である。

棺体　口縁部と底部を欠損する甕棺で、口縁下と胴部に沈線が存在しない。胴上位は垂直に伸び、胴下位でやや膨れる。三雲・井原遺跡柿木地区3号甕棺下棺と同時期と考えられる。

3号甕棺墓（第53図）

1号木棺墓の西側で3号木棺墓に挿入される形で検出された甕棺墓で、削平が著しく胴下位から

底部のみ残存する。主軸方位N－25°－Wをとる。

棺体　胴部に丸みを持つ壺で、胴上位を欠損する。底部は平底で、外面は斜め方向のミガキ、内面はナデの痕跡が明瞭に残る。

４号甕棺墓（第53図）

調査区南西角で検出された甕棺墓で、削平により甕棺の上部は破壊されている。墓壙は歪な楕円形で、上棺の鉢が、下棺の壺を覆っている。主軸方位はN－74°－Wをとる。

上棺　底部を欠損する鉢形土器で、口縁は外方に開き、端部の刻み目はない。内外共にミガキの痕跡がわずかに残る。

下棺　口縁部を打ち欠きしている壺で、頸部と胴部の境に1条の沈線を入れる。胴中位に胴部最大径があり、内外面共にミガキを施す。

３．小結

八能地区224番地の調査では、弥生時代中期初頭の墳墓群と弥生時代中期後半に掘削された大溝２条、古墳時代前期後半の住居群が確認された。

大溝は、弥生時代中期後半と見られる甕や壺の底部片が少数あることから見ると、この時期が掘削時期で良いのであろう。この２条の大溝は、並行して存続していたと考えられ、居住域と墓域を区画する意味合いを持つ。上層に弥生時代終末期～古墳時代前期中頃の遺物が多く含まれており、埋没時期はこれまでの調査結果と変わらない。また、１号住居が大溝を切っており、この住居の時期が古墳時代前期後半であること、２号溝に切られる７号住居は、大形の三角形石包丁が出土しており、弥生時代前期の円形住居と考えられことから、切り合い関係とも矛盾しない。

一方、調査区南東側で検出された墳墓群は、木棺墓を中心に周辺に甕棺墓が存在する。１号木棺墓は刳抜形木棺と考えられるが、副葬品は出土していない。１号甕棺上棺は、短い逆Ｌ字形の口縁を持つ鉢形土器で、口縁下の突帯と共に、刻み目を施し、弥生時代中期初頭と考えられる。２号甕棺は大形甕棺で、柿木地区３号甕棺下棺と同じ型式で金海式甕棺から汲田式甕棺への過渡期的なタイプである。宮井善朗氏によれば、早良、福岡平野など周辺地域では、城ノ越期に甕棺の空白期があり、糸島地域で壺形から甕形へと変容している中、周辺地域では金海式甕棺を継続して使用し、城ノ越~汲田式甕棺成立後に糸島地域から再受容したものと考えられるとしている（宮井2016）。糸島地域は、甕棺の出現から汲田式甕棺の成立まで、その型式変化が追える数少ない地域である。

（江崎）

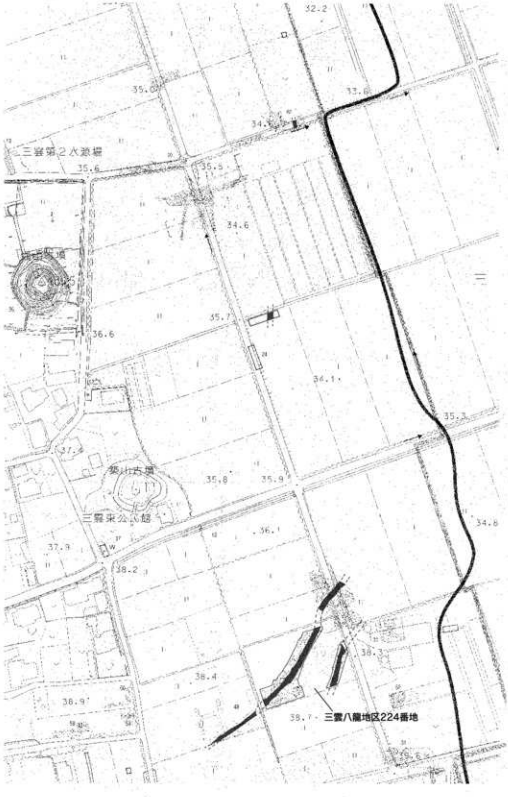
【参考文献】

江崎靖隆2013「第４章　遺構編　２甕棺の編年」『三雲・井原遺跡Ⅶ－総集編－』糸島市文化財調査報告書第10集

松村道博編1994『飯氏遺跡群２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集　福岡市教育委員会

宮井善朗1996「吉武高木遺跡群に関する若干の問題－前期末、中期初頭を中心に－」『みずほ』第20号大和弥生文化の会

宮井善朗2016「第Ⅳ部　第３章　弥生時代　７飯氏遺跡」『新修福岡市史　資料編　考古１』遺跡から見た福岡の歴史－西部編－



第54図　三雲八龍遺跡周辺実測図（1/2,500）

第４章　まとめ

Ⅰ．三雲・井原遺跡の掘立柱建物について

三雲・井原遺跡は南北1,500ｍ、東西750ｍの面積約60haを測るわが国を代表する弥生時代の拠点集落で、『魏志』倭人伝にでてくる伊都国の王都と位置付けられている。しかし、これまでに確認された掘立柱建物は非常に少ない。その原因の一つは、遺構の保存を前提にした発掘調査を行っているために、遺構の平面確認に留めていることもあげられよう。角浩行は掘立柱建物の集成を行った結果、平成25年度段階で11例を確認し、調査区の狭さから掘立柱のプラン全体が明らかにされたものは少ないことを指摘する（角2013）。

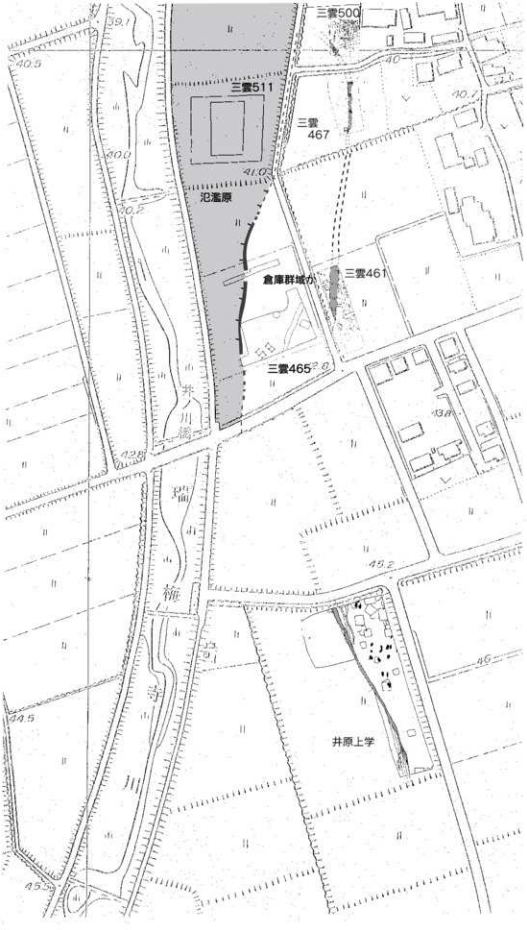
ちなみに伊都国の東の玄関口ともされる今宿五郎江遺跡では、平面プランが１間×１間、１間×２間を主体とする100棟以上の掘立柱建物が確認されており、大型のものとしては、方形の柵に囲まれた４間×５間以上の「久保園タイプ」の建物も確認されている（森本2012）。

また、糸島市内に限っても、一の町遺跡では大型建物を含む多数の掘立柱建物が確認されており、それぞれの主軸はおおむね統一性があることが指摘されている（河合編2009）。いまだ未確認ながらも三雲・井原遺跡でも、このような大型建物の存在が想定されている。

宮本長二郎によると、掘立柱建物とは「地中に掘立て、あるいは打込まれた柱で側壁面を形成し、竪穴住居とは異なって、床面を地表面上に設けた建物」のことで、狭義では低い床敷の平屋建物のことを示す（宮本1996）。掘立柱建物の分類としては、平面積が約40㎡前後以上のものを大型建物、100㎡前後かそれ以上を超大型とする（宮本1991）。久住猛雄は弥生時代・古墳時代の大型建物を分類し、弥生時代中期前半に出現する梁行３間以上、桁行５間以上の建物で屋内棟持柱をもつ大型平屋建物の存在を指摘し、久保園遺跡１号建物の事例から久保園タイプとする。久保園タイプには、福岡市那珂遺跡23次、鳥栖市柚比本村遺跡、筑紫野市貝元遺跡などが該当し、一の町遺跡２次１号大型建物、３次１号大型建物も含まれる。三雲・井原遺跡では調査区の関係で屋内棟持柱の有無が未確認であるが、仲田地区掘立柱遺構、五反間地区建物２が該当する（久住2003）。中尾祐太は2014年に福岡平野の掘立柱建物を集成し、１間×１間のものより、１間×２間のものが多いことを指摘した（中尾2014）。

三雲・井原遺跡の弥生時代から古墳時代前期頃に該当する掘立柱建物を集成したものが表１である。2013年の集成よりもわずかに事例が増えているにすぎないが、以下で概観していく。

三雲・井原遺跡で最も古い掘立柱建物は井原横枕2552-1で確認された３号掘立柱建物である。柱穴から板付Ⅱａ段階の壺や甕が出土しており、弥生時代前期中ごろに位置付けられる。１間×５間分が確認され、桁行8.64ｍ、梁行2.56ｍ、面積22.11㎡を測る。調査区の関係で不明部分が多いが、弥生時代前期の掘立柱建物には福岡市下月隈Ｃ遺跡や東入部遺跡、粕屋町江辻遺跡などで、同様な建物が検出されており、本例も梁行は１間の可能性が高い。なお、井原横枕遺跡と北に位置する三雲・井原遺跡の間には、井原2577番地など遺構が検出されない地区があり（平尾編2014）、今後の調査を待たないといけないが、同一の遺跡でない可能性が高い。そのため、狭義の三雲・井原遺跡で最古の掘立柱建物は、本書で報告した南小路465番地で確認された１号掘立柱建物である。１号



第55図　三雲南小路地区遺構配置図（1/1,000）

掘立柱建物は弥生時代中期後半に位置付けられる１間×２間のもので、桁行5.0m、梁行3.0mを測る。柱穴1.2m×0.7m程度の隅丸長方形を呈し、二段掘である。半裁した柱穴では、いずれも根石が確認されたことから、建物に重量物を入れることを想定した構造となっている。また、平面検出のみの２号掘立柱建物も、１号掘立柱建物と主軸を合わせて、併行していることから同時期と考える。その性格は、瑞梅寺川に面した遺跡の西端部から東へ10mほどの箇所に位置することから、瑞梅寺川を遡上して持ち込まれる物資を納める倉庫と位置付けたい。同時期の遺構としては東接する南小路地区461番地で確認された南北に帯びる大溝がある（平尾編2014）。これら遺構の配置を見ると、瑞梅寺川と大溝に挟まれた三角形の範囲が、弥生時代中期後半段階の三雲・井原遺跡における倉庫群として位置付けられる可能性があり（第55図）、東側に位置するほぼ同時期に位置づけられる三雲南小路王墓との関連も注目される。

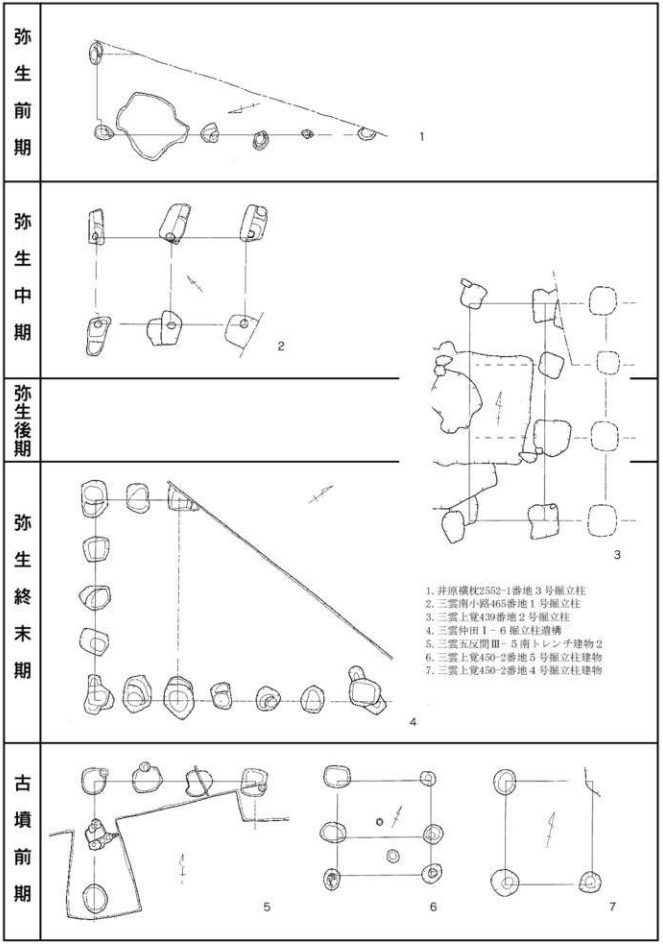
また、中川屋敷471・482－1番地の調査は県道拡幅に伴う狭小なトレンチ調査であったが、列状に並ぶ柱穴を確認している。これも建物になる可能性が指摘されている。

弥生時代後期も事例が少なく、列状遺構とされる南小路地区の例のみである。また、上覚439番地の２号掘立柱建物は、平面プランのみの確認で、時期の特定はできないものの、古墳時代中期前半の35号住居に切られていることと、南小路王墓と南接する墳丘墓の可能性があるもののすぐ南側に位置するという立地から、弥生時代中期後半～後期頃に位置付けられる可能性がある。調査区内では１間×３間のみで東西2.4m、南北6.6mまで確認できるが、東側に延びる可能性もある。柱穴も一辺１m程度と大きいことから、延びる場合は総柱建物となるとも考えられ、位置関係からしても王墓や墳丘墓に関連する建物と言えるだろう。

その後、弥生時代終末期になると、遺跡の北側に位置する仲田地区Ⅰ－16で久保園タイプの可能性がある２間×４間の大型建物が確認されるが、その正確なプランの確認には追加調査が必要である。古墳時代に入ると、掘立柱建物は２種類に分かれる。ひとつは大型のもので、五反間Ⅲ－５南トレンチで確認された建物２は古墳時代前期前半の可能性がある。現段階で３間×２間のみ確認され、南側の調査区外に延びていく。もう一つは１間×１間の建物で、上覚450－2番地で４棟確認されている。時期の特定は難しいが古墳時代前期の可能性が高い。

そのほか、時期の特定ができないものとして、サキゾノ地区Ⅰ－６～８の掘立柱建物、井原堺地区D地点の掘立柱建物がある。

以上、三雲・井原遺跡における掘立柱建物を概観したが、現段階では弥生時代中期後半から確認され、終末期～古墳時代前期のものが比較的多い（第56図）。分布的には遺跡の西～南西部に位置する屋敷・南小路・上覚地区と北～中央部に位置する仲田・五反間、番上地区にまとまる傾向がある。これまでも指摘されたように三雲・井原遺跡における掘立柱建物の確認事例は少ないが、遺跡の性格を知り、他の遺跡や他地域との比較もできる重要な遺構であることから、掘立柱建物の確認は今後の重要な課題といえる。（平尾）



第56図　三雲・井原遺跡掘立柱建物変遷図（1/120）

【参考文献】

河合修編2009『一の町遺跡発掘調査概要』志摩町文化財調査報告書第30集

久住猛雄2003「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『日本考古学協会2003年度滋賀大会研究発表資料』

角浩行2013「掘立柱建物」『三雲・井原遺跡Ⅷ』糸島市文化財調査報告書第10集

中尾祐太2014「弥生時代の掘立柱建物―福岡平野を中心として―」『東アジア古文化論攷』2　高倉洋彰先生退職記念論集刊行会

平尾和久編2014『三雲・井原遺跡Ⅸ』糸島市文化財調査報告書第13集

宮本長二郎1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物―本編―』第29回埋蔵文化財研究集会

宮本長二郎1996「弥生・古墳時代の掘立柱建物」『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

森本幹彦2012「今宿五郎江・大塚遺跡」『伊都国の研究』学生社

地区名	名称	時期	規模	備考	出典
五反間Ⅲ－5南トレンチ	建物2	古墳前期前半	3×2＋α	調査区外に延びる	福岡県63（1982）
仲田Ⅰ－16	掘立柱遺構	弥生終末	2×4	調査区外に延びる	福岡県60（1981）
屋敷489番地	1号掘立柱建物	弥生か	1×1＋α	柱穴80cm	前原市90（2006）
上覚450-2番地	1号掘立柱建物	古墳前期か	1×1		前原市86（2004）
上覚450-2番地	2号掘立柱建物	古墳前期か	1×1		前原市86（2004）
上覚450-2番地	3号掘立柱建物	古墳前期か	1×1		前原市86（2004）
上覚450-2番地	4号掘立柱建物	古墳前期か	1×1		前原市86（2004）
上覚450-2番地	5号掘立柱建物	古墳前期か	1×2		前原市13（1984）
上覚	2号掘立柱建物	弥生	1＋α×3	調査区外に延びる。平面プランの確認のみ。総柱建物の可能性。柱穴1m	糸島市9（2014）
南小路	柱列遺構	弥生後期	2×？		前原市63（1997）
南小路465番地	1号掘立柱建物	弥生中期後半			本報告
南小路465番地	2号掘立柱建物	弥生か		平面プランの確認のみ	本報告
三雲ヤリミゾ434番地	2号掘立柱建物	4・5世紀か	1×1		前原市92（2006）
中川屋敷471・482-1番地	掘立柱建物	弥生中期か	3×？		前原市92（2006）
サキゾノⅠ－6～8	掘立柱建物	不明	1×2＋α	報告書の記述なし	福岡県63（1982）
井原堺D地点		不明	1×2か		前原市8（1980）
井原横枕2552-1番地	3号掘立柱建物	弥生前期中頃	1×5＋α	調査区外に延びる	糸島市7（2012）

表1　三雲・井原遺跡掘立柱建物一覧

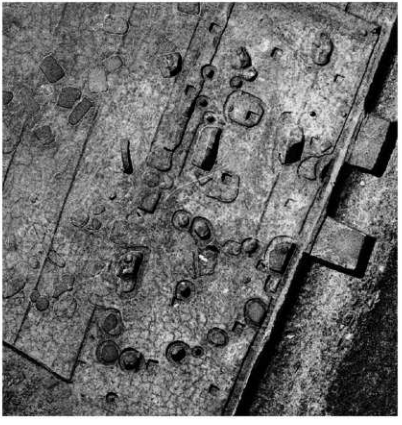
写真図版

1-1　三雲南小路地区465番地遠景（東から）

1-2　三雲南小路地区465番地調査区全景

図版2

2-1　大溝全景（下からトレンチ1・2・3・4）



2-2　1号掘立柱建物全景

3-1　1号住居跡（西から）

3-2　1号土坑（北西から）

3-3　大溝トレンチ３土層断面

図版4

4-1　甕棺墓

4-2
三雲井ノ川地区511番地調査区遠景

4-3
三雲井ノ川地区511番地調査区全景

11-6

11-7

11-12

14-2

14-3

14-4

14-7

15-2

三雲南小路地区465番地出土遺物①

図版6

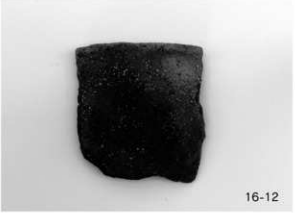
15-5

15-6

15-7

15-10

16-3


16-12

16-15

16-16

三雲南小路地区465番地出土遺物②

17-2

17-5

17-6

17-7

17-8

17-11

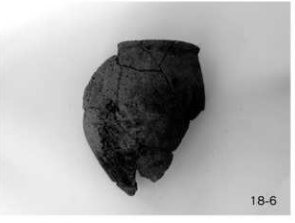
17-12

18-1

三雲南小路地区465番地出土遺物③

図版8

18-4


18-6

18-7

18-8

18-9

19-1

19-2

19-4

19-7

22-2

22-5

24-20 25-9

23-15

24-17 23-13

23-14 26-11

26-9

図版10

三雲南小路地区465番地出土遺物⑥

11-1　三雲八龍地区224番地
1号溝Cトレンチ土層断面状況（南から）

11-2　三雲八龍地区224番地
1号溝Dトレンチ土層断面状況（南から）

11-3　三雲八龍地区224番地
2号溝Eトレンチ土層断面状況（南から）

図版12

12-1　三雲八龍地区224番地
2号溝Ｆトレンチ土層断面状況（南から）

12-2　三雲八龍地区224番地
1号住居完掘状況（真上から）

12-3　三雲八龍地区224番地
1号住居土器出土状況（北から）

13-1　三雲八龍地区224番地
2号住居と甕棺墓群（真上から）

13-2　三雲八龍地区224番地
1号木棺墓出土状況（東から）

13-3　三雲八龍地区224番地
1号甕棺墓検出状況（北から）

図版14

14-1　三雲八龍地区224番地
3号甕棺墓検出状況（西から）

14-2　三雲八龍地区224番地
4号甕棺墓検出状況（北から）

14-3　三雲八龍地区224番地
敷石遺構検出状況（西から）

30-1

30-2

30-3

31-6

32-8

32-10

32-13

32-16

三雲八龍地区224番地出土遺物①

図版16

33-18

33-26

34-39

34-40

37-51

37-55

37-56

38-65

三雲八龍地区224番地出土遺物②

38-66

41-2

41-9

41-11

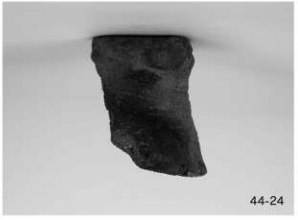
43-5

43-6

44-17

44-20

図版18


44-24

46-1

46-10

46-11

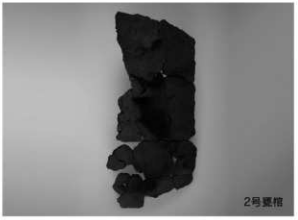
47-13

47-19

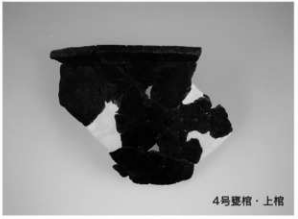
1号甕棺・上棺

1号甕棺・下棺

三雲八龍地区224番地出土遺物④


2号甕棺

3号甕棺


4号甕棺・上棺

4号甕棺・下棺

報 告 書 抄 録

ふ り が な	みくも・いわらいせきX
書　　名	三雲・井原遺跡X
副 書 名	三雲南小路・八龍地区の調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	糸島市文化財調査報告書
シリーズ番号	17
著 者 名	平尾和久（編）、江﨑靖隆
編 集 機 関	糸島市教育委員会
所 在 地	〒819-1192　糸島市前原西一丁目１番1号
発 行 年 月 日	平成30（2018）年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三雲・井原遺跡	三雲南小路465	40222		33.3211	130.1423	2013/11/1 ～ 2014/3/31	1133㎡	重要遺跡確認
	三雲南小路465			33.3213	130.1422	2013/11/1 ～ 2014/3/31	－	重要遺跡確認
	三雲八龍224			33.5391	130.2453	2005/11/1 ～ 2006/3/31	924㎡	重要遺跡確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三雲南小路465	集落	弥生	住居、大溝、掘立柱	弥生土器、石器	集落の縁辺部の調査で、倉庫群を確認
三雲井ノ川511	－	－	なし	なし	集落の段落ち部の確認
三雲八龍224	集落	弥生・古墳	住居、大溝、甕棺墓、木棺墓	弥生土器、土師器	集落の大溝を確認

三雲・井原遺跡X

—三雲南小路・八龍地区の調査—

糸島市文化財調査報告書　第17集

平成30年(2018) 3月31日

発　行　糸島市教育委員会
福岡県糸島市前原西一丁目1番1号
TEL 092-332-2093

印　刷　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5
TEL 0955-23-5188